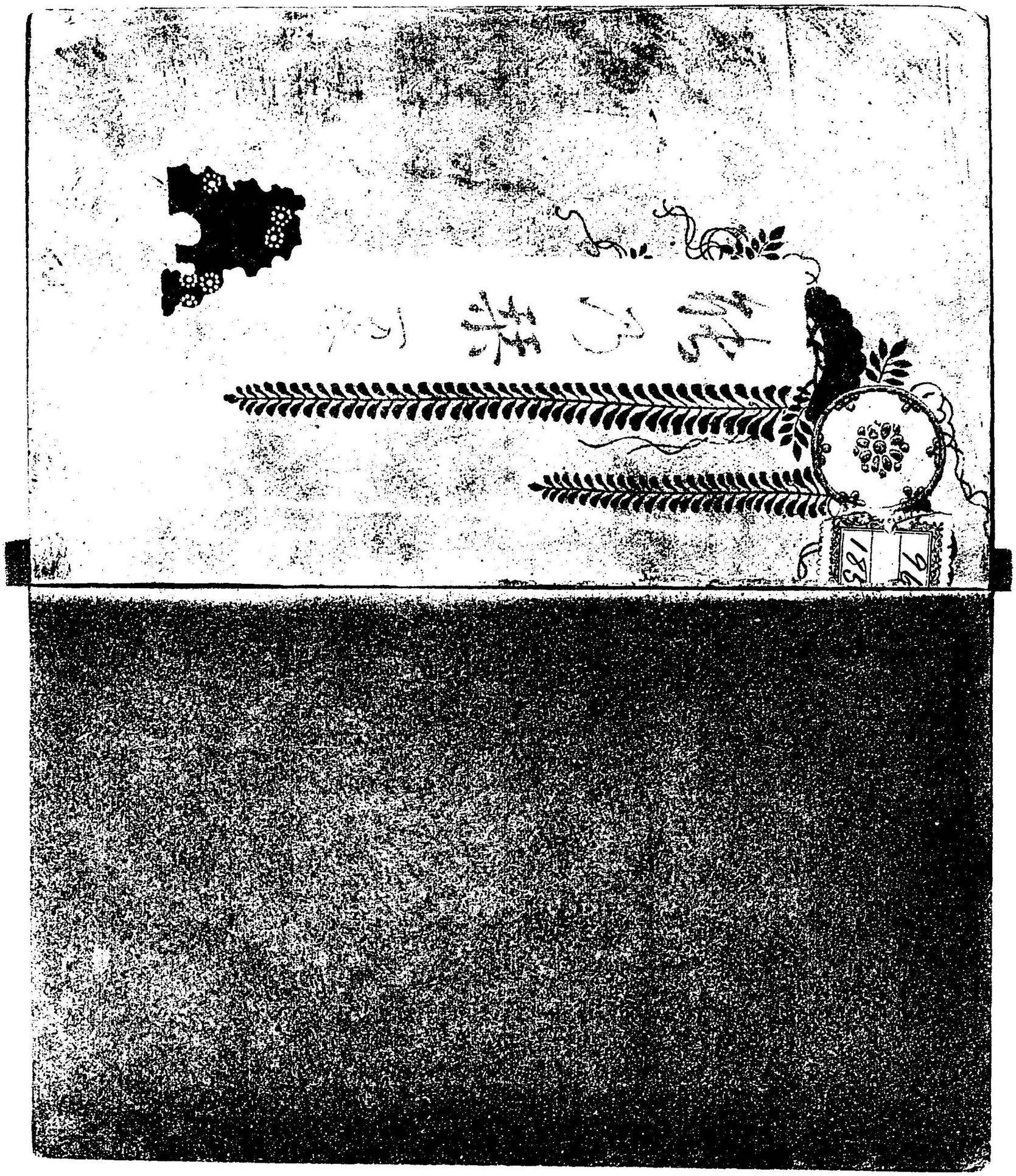


はしがき

能見る人は多けれど。知りて見る人は少なけれど。知りて見る人まれには有らん。されど味ひて見る人は極めて多からじ。おのれもとより知れりといふにはあらず。ましてや味ひて見る人の内には入れらるべからざるを思へど。すきなる道は。人にも分ち。共に樂しまばやと希ふ心のおさへがたくて。遂に此草子とはなりたるなり。されど此草子よ。能を舞ひ習はしめんの心ならねば。説くところに精粗あり。形附とひとしなみに見るべからず。その家々の秘事をあばきて。ひとり得意なるおもゝちせんの心ならんや。

能みる毎に書き留め置きたる反古どもの積れるを。わづかに集めなしたるのみ。今は世になき喜多文十郎のいへりしは。おのれ若くて家元の六平太に學びし頃。獅子にても亂にても容易く敎へたり。何故ぞと問へば。知りてさへ居らば見る毎に味出づと。さすがは大家の言なりと感じたる事ありき。おのが力をも量らずして筆とりつるも。そも〳〵此心の外かは。明治三十五年の冬。山茶花の二ひら三ひらこぼるゝ夕べ。

大和田建樹

目次

總說

能の種類……一
役者……六
地謠と囃子方……八
舞臺と橋掛……九
形……一〇
位と緩急……一四
中入と物着……一六
次第……一六
名乘笛……一七
一聲……一七

出端……一八
早笛……一八
大癒……一九
下羽……一九
來序……一九
亂序……二〇
あしらひ出し……二〇
早鼓……二〇
祝詞……二一
舞……二一
舞働……二四
翔……二五
祈……二五

立廻……二五
イロヘ……二六
幕……二六
面……二七
裝束……三一
作物……四一
小道具……四六
替の形……五二
囃子と仕舞……五七
翁……六三
高砂……七九
八島……一〇一
東北……一一八

目次

蘆刈……一二八
船辨慶……一三九
三輪……一五七
兼平……一六七
羽衣……一七五
安宅……一八五
安達原……二〇六
蟻通……二一〇
田村……二一七
江口……二三六
百萬……二四六
猩々……二六〇

能の栞 一の巻

大和田建樹著

總說

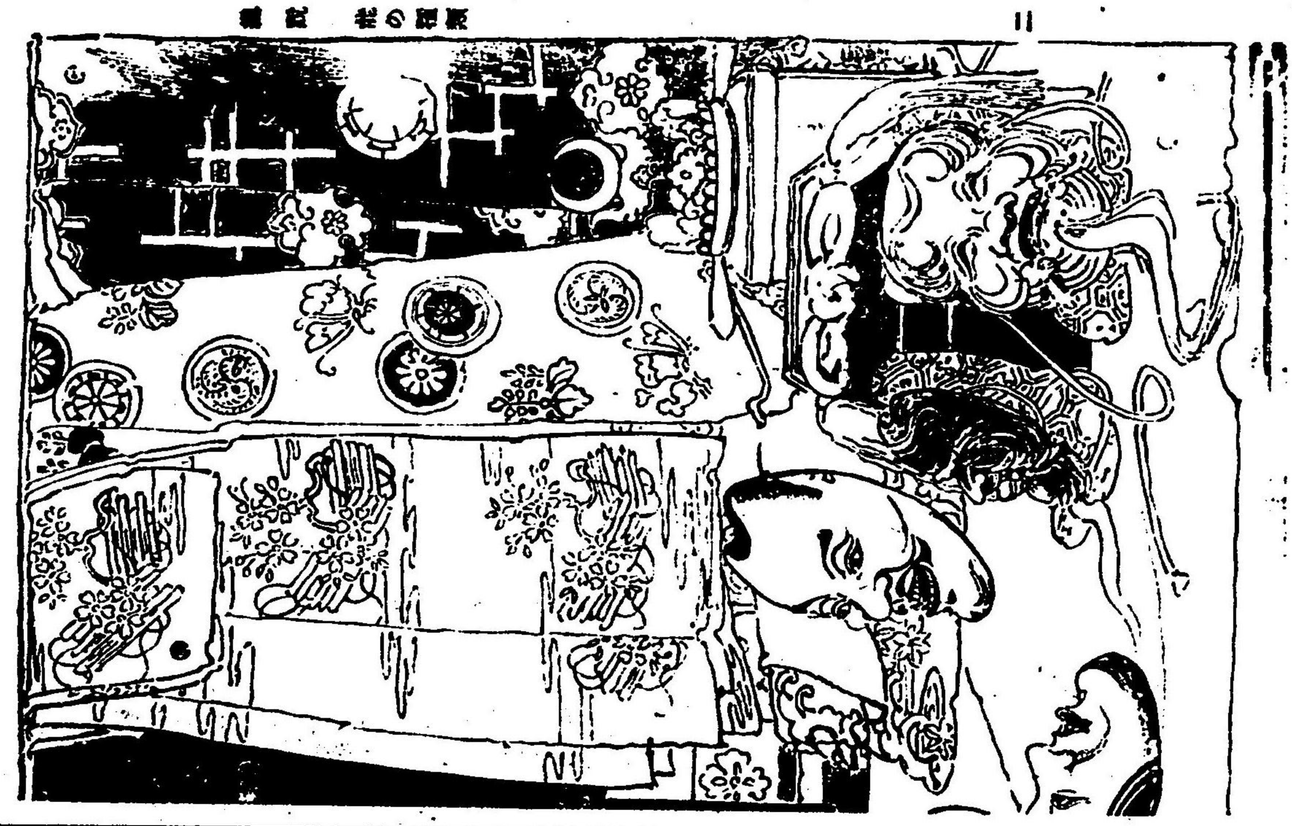
能の種類

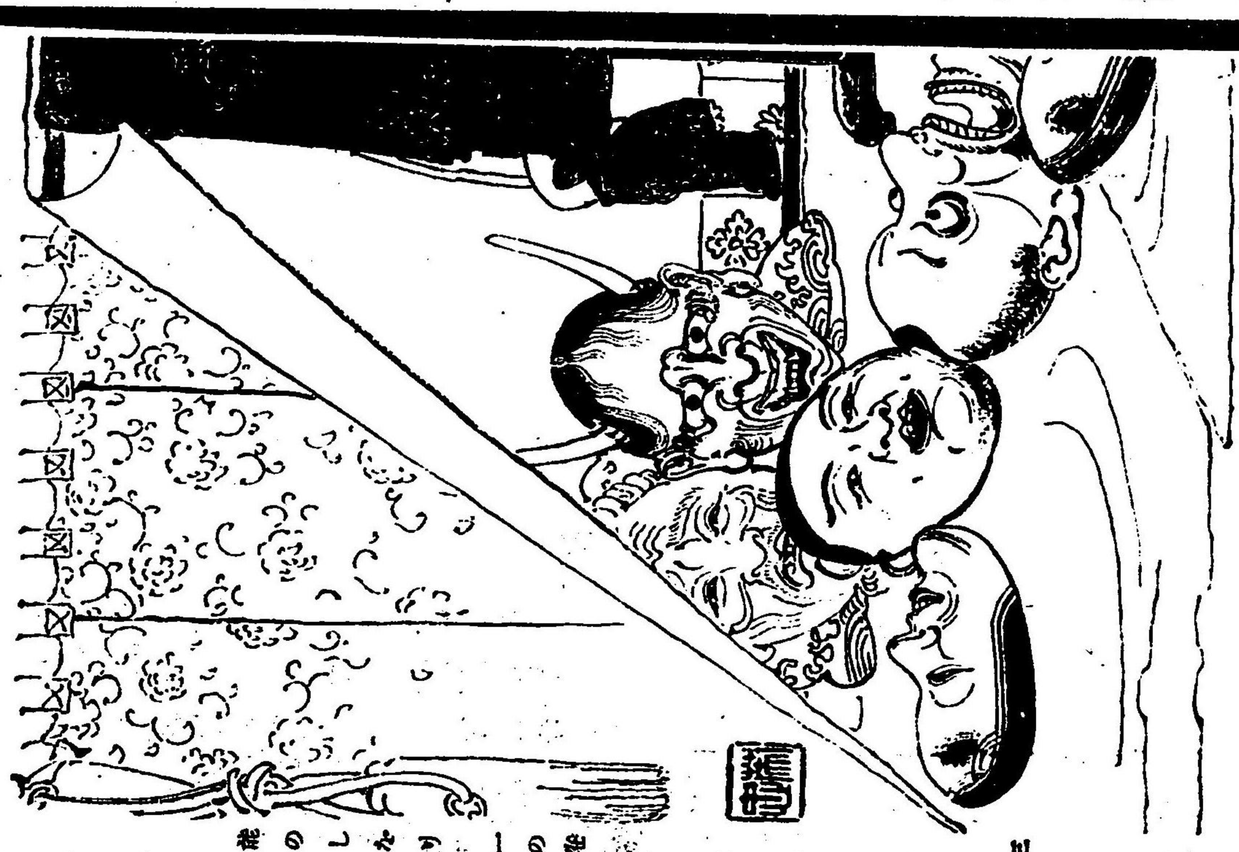
能には種々の作あれども。まづ之を一日五番と立てゝ。おほよそ五種類に分つを得べし。

其一番を脇能といふ。脇能とはワキ先づ出てゝ禮腦の式をなし。次第名乘道行を歌ひ。特にワキの役を重しとするもの故。かくは稱へ始めたるなれども。今はワキの如何にかゝはらず。初番の能をいふ名稱となれり。脇能にする能は。神能とて高砂老松難波養老の如き

脇能

神能





略脇能

神祇の事を作れるものにて。ワキは烏帽子狩衣の大臣姿の出立なるを本旨とす。この本旨に叶はざるものを假に用ふる時は略脇能と呼び。もしそれが修羅物ならば修羅立と稱ふるなり。

修羅物

其二番目には修羅物とて。武將武士などの幽靈出て。合戰の昔語する事を仕組めるものを用ふ。田村八島忠度敦盛などの類なり。されど四番目にすべき鉢木小袖曾我などの類をもて代用さする事もあり。

鬘物

其三番目には鬘物とて。上品優美なる女のシテなるものを用ふ。江口東北羽衣松風などの類なり。是も略しては他の重々しく位あるものをもて來て代ふることあり。

四番目現在物

四番目には人情として面白く感ずべきものを用ふ。現在物とて。幽靈ならぬ此世の人の上を作れる。鉢木七騎落安宅夜討曾我望月の類いと多く。

狂女物

また狂女物とて。物狂の筋を仕組みたる。百萬櫻川班女隅田川の類も少なからず。其外阿漕松虫葵上藤戸熊坂などの類も之に入るべし。

五番目

五番目には鬼事天狗事か祝言物または賑はゝしく花やかなる能を用ふ。鬼事とは安達原(一名黒塚)野守の類。天狗事とは鞍馬天狗善界の類。祝言物とは岩船金札猩々の類。賑はゝしく花やかなるものとは。烏帽子折船辨慶融石橋の類なり。

役者

シテ

能一番の主人公たるものをシテ(仕手)といふ。一番の内始終一人一躰なる安宅百萬の如きもあり。中入して裝束を改め。三輪(始は里女。後は明神)八島(始は漁翁。後は義經)の如く一人なれども二躰となるもあり。また船辨慶(前は靜。後は知盛)藤戸(前は母。後は其子)の如く中入後全く別人となるもあり。二度いづる時。前なるを前シテといひ。後なるを後シテといふ。

前シテ後シテ

ワキ

シテの相手役たるものをワキ(脇)といふ。烏帽子狩衣の大臣脇もあり。

水衣角帽子の僧脇もあり。兜巾篠懸の山伏脇もあり。素襖上下の男脇もあり。梨子打烏帽子直垂の武將脇もあり。されども面を着くるワキと。女姿のワキとは一つもわらず。

シテヅレワキヅレ

シテに附屬せる助役をシテヅレ(仕手連。略してはツレ)といひ。ワキに附屬せるをワキヅレともツレワキともいふ。又シテヅレにてもワキヅレにても。太刀持などの如き從者に出づる役をトモと呼び。一

トモ立衆

同に立ち並びて次第道行など歌ふ數に加はるまでの役を立衆と名づく。シテヅレの内にても。蟬丸の能の蟬丸の役や。小袖曾我の五郎。夜討曾我の十郎などは。ほとんどシテと同等の重役なれば。兩ジテと稱へられて。二人連名にて番組に乘る事もあり。

子方

幼年の者のする役を子方といふ。是には三種類ありて。隅田川の梅若丸の如く。望月の花若の如く。もとより子供として作りたるものなれば子方を用ふるのと。花筐の帝王や安宅の判官の如く。其物を神聖にし。又はおはれを深く感ぜしめんが爲め殊更子供にしたるものと。竹生島の天女。鶴亀の能の鶴と亀との如く。大人にてもすれど或時は子方を用ふるものとあり。

アヒ　狂言サカシ

狂言方の役にて能に出づるをアヒ(間)といふ。能の間を連續さするより起れる名なり。狂言師の役ゆゑ狂言とも呼び。又ヲカシとも稱ふ。これに二種類ありて。道成寺の能力や竹雪の繼母の如く。シテ又はワキのアヒシラヒとなすものと。中入の間に出て、其裝束の間を繋ぎとむるものとあり。中入の間に出づるものにも田村融の如く。ソキに所望せられて土地の物語などするを。語間とも居語ともいひ。

語間

加茂嵐山の如く。神能の間に末社の神躰など出て、祝ひ舞ふものを。

末社間

末社間といひ。羅生門土蜘などの如く。早打に出て立ちて事の急を

早打間

觸れに來るを早打間といふ。

後見

舞臺に出て、役者の裝束を直し。道具を取扱などする人を後見といい

物着せ

ひ。又舞臺にて裝束着さする人を物着せといふ。

地謠と囃子方

同音

地謠の地の處を同吟する人を地謠といひ。略しては地とのみも稱ふ。また同音と呼ぶ事もあり。舞臺の片側の處に居並び。扇を右の手に立てゝ持ち歌ふ。後の側の左の端は音頭にして即ち地頭なり。囃子方座に着くと同時に切戸より出でゝ着席し。終りも笛まづ立つを相圖に後の下座より順々に引くなり。中入の間といへども席を退き行儀を崩す事なし。

四拍子しらべ

囃子方は笛小鼓大鼓太鼓の四役にて。之を四拍子とも又拍子方ともいふ。一番の能の初まる前。先づ幕の内にて音調を調べ試むる事あり。これをシラベと稱ふ。かくて幕の左の端より出でゝ舞臺の後に正面むきて座し。小鼓と大鼓とは床几に掛り。太鼓は役の無き間タツロクと稱へて横に向き居る。

橋掛

鏡の間

一の松二の松三の松

仕手柱

名乘座

太鼓は能によりて有ると無きとあり。有るものは高砂羽衣船辨慶の類。無きものは田村江口蘆刈の類。

舞臺と橋掛

能をする場所を舞臺といふ。正式は三間四方にして其後に横板の餘地を置き。後見などは皆こゝに居るなり。横板に續きて斜に樂屋に附きたる道を橋掛といひ。橋掛より樂屋へ入る口の處を鏡の間といふ。鏡ありてシテの出る時衣紋などつくろふ處なり。鏡の間と橋掛の隔に幕ありて。役者の出て入る時は之を上げ。すめば又下し置く。橋掛の欄干外には松ありて。舞臺の方より數へて一の松二の松三の松と呼ぶ。一の松過ぎ右に折れて舞臺に入る處の角の柱を仕手柱といふ。仕手の立ちどまりて歌ひ出し又は所作をする處なればなり。又その立ちて歌ひ出す處を名乘座といふ。「是は此あたりに住む者にて候」など發言する處なればなり。仕手柱の反對の側にある。すなは

後見柱
狂言柱
太鼓柱
目付柱
脇柱
大臣柱
大小前

ち橋掛より舞臺に入る時左に見る柱は。後見のすわる處ゆゑ後見柱とも。アヒの着座する傍ゆゑ狂言柱とも。太鼓の後なるゆゑ太鼓柱ともいふ。

舞臺先の右の角なるを目附柱といふ。シテ常に月といひては見上げ。花の降るといひては見上げ。其目當にする處なり。之と並びたる左の方なるを脇柱といふ。ワキの着座する處なり。ワキは大臣脇をもて主とす。故に又大臣柱ともいふなり。仕手柱と並びて笛吹のすわる處は。これを笛柱といふ。道成寺の鐘の綱を結びとむる鐶は此柱に附きてあり。

能の事かきたるものに大小前といへるは。大鼓小鼓の前といふを畧したるにて。すなはち大小の拍子方のすわる前の處をいふ。舞臺にては左にもよらず右にもよらず丁度眞中をいへるなり。

形

手の名

能にて形といふは。謡の文句の意味を。手つき面づかひ足の運び身のふるまひ等にあらはすをいふなり。ある時は所作ともいふべく。ある時は仕方ともいふべく。又は舞などをも含みていふべし。

形をなすに常に多く用ひらるゝ名稱は。知りおく必要あり。ヒラクとは跡へ三足引をいひ。サスとは扇又は手を出だして其物を指し示す心にて見るをいひ。サシマハスとは指して見まはす心なるをいひ。胸ザシとは扇を胸に卷込むやうにあてゝ前に指すをいひ。又は之を卷ザシともいふ。左右とは身をも手足をも左に向け又右に向くるをいひ。ウチコミとは開き又は引く時扇又は何にても前の方に出だすをいひ。サシワケとは左の手と右の手と一つづゝ出だして。兩方に物を撥き分くるやうにするをいひ。雲の扇とは開きてうつむけたる扇と左の手と合はせて。引き分くるやうに左右へのくるをいひ。鐵の扇とは扇を立て要の處を持ちて。上より前にゆるすやうにするを

いひ。打合とは両方の手を一度に打ち合はするやうにするをいひ。イウケン扇とは扇を胸の處より上に上げて。心の晴れたるやうの形をするをいひ。マネキ扇とは扇にて招く形をするをいひ。ハネ扇とは扇を左に持ち。右の肩よりはねるやうにするをいひ。カザシ扇とは扇を平手にして持ち。笠などにて顔を高く隠すやうにするをいひ。マキコミ扇とは顔を隠す時扇を前に出だし。一つ巻き込むやうにするをいひ。上扇とは舞上りの和歌。またはクセの上げなど歌ふ時。扇を横に前に出だして上に引きあぐるをいひ。又は上羽扇ともいふ。角トルとは目附柱にて足を留め左に廻るをいひ。乗込とは扇を上げて前に段々とおろし。足の留まると共に拍子ふむをいひ。下に居るとは片膝立てゝすわる事。居立つとは跏を爪立てゝすわる事。安座また平臥とは膝を組む事。ガッシとは左右の膝をかはり〳〵に立てゝ進む事をいひ。佛ダフレ又枯木ダフレとは。立ちたるまゝ腰を曲

げずに後にたふるゝをいひ。面使ふとは顔を左右に振りて物を見る事。面を伏せ又は曇らすとは。下ひく心持になる事。すなはち悲しき時はづかしき時などにするをいひ。シヨルとは手又は扇をあてゝ泣く形をするをいふ。此外にもあまたあれど。普通の名稱とかはらぬものは略せり。

足拍子に三種あり。一つは其音又は其さまをあらはすものにて。「どろ〳〵」といふ文句に踏み。「波を蹴立て」といふ文句に踏むが如きをいひ。一つは音にも其樣にもあらねど。興に乗じ歡喜に堪へずして踏むもの。又は形の上より賑はしく面白からしめんために踏むものにて。「花を見すつる雁がねの」と踏み。「雲となり雨となる」と踏むの類をいひ。今一つは興に乗ずる心もあるべけれど。囃子方と約束ある合圖となるもの。すなはち打切の前の拍子。舞の段の前の拍子などの之に屬すべし。

拍子の名

常は一つ拍子二つ拍子四つ拍子など數もて呼べど。その特別の名あるものは。打切の前の拍子。たとへば初同の「名に流れたるきよみづの」と二つ踏み。クセの中の「のどかなる浦の有樣」と二つ踏む類を。据拍子といひ。能の終りに「失せにけり」「めてたけれ」などゝ二つ踏むを。留拍子といひ。乘込む時に「又立ちよりてうつゝか夢か」などゝ二つ踏むを。乘込拍子といひ。トン〳〵〳〵〳〵トトンと六つ踏みたるあとに。トコトン〳〵〳〵トトンと七つ踏むを剣拍子といひ。トントントンと三つ踏みてトン〳〵トトントンと踏む拍子を踏切拍子といふ。剣拍子は「おそろしや」の返しなどに用ひられ。踏切拍子は「その影にかくさるゝたとへば月の」などいふ處にあり。

位

位と緩急

その能の態度に。靜におちつきたるものと。さら〳〵としたるものと。極めて早きものとあり。その度合を名づけて位といふ。老人貴人名僧などの類は靜におちつき。若者武士などの類はさら〳〵とし。祝言ものなどは極めて早く愉快なるを常とす。

緩急

その能の内に。靜なる位より早き位に變化し。早きものより俄に靜まる處あり。名づけて緩急といふ。俊寛にていはゞ。「こはいかにさても夢ならば。さめよ〳〵とうつゝなき」と狂するが如く急に進み。「俊寛が有樣を見るこそあはれなりけれ」と又もとの位に歸りて靜まるの類なり。

序破急

足一つ踏み出だすにも。初は靜に。次は中位に。終は進むといふ呼吸あり。名づけて序破急といふ。序は靜なる處。破は中位の處。急は進みたる處をさすなり。クセにても舞にても此心にて見ば分るべし。

また全躰の上につきて。此能は序の位。此能は破の位。此能は急の位といふ事もあり。舞に序の舞破の舞急の舞あるは。その舞全躰の

位につきて名づけたるなり。

中入

中入と物着

能の半にてシテの一度樂屋に入るを中入といふ。高砂にては老人のシテ中入して後は明神の神体となり。田村にては童子のシテ中入して後は田村麿の本体をあらはし。船辨慶にては靜のシテ中入して後は知盛の幽靈に早がはりするの類なり。

中入なき能

物着

能によりては。シテの出てたるまゝにて樂屋に中入せぬものあり。羽衣杜若安宅俊寛の類なり。但し此内にても。羽衣杜若の如く舞臺にて裝束を着。又は冠烏帽子など着るものあり。名づけて物着といふ。

次第

次第

謠に次第といふ文句あり。高砂の「今をはじめの旅衣。日もゆくすゑぞ久しき」の類なり。ワキ又はシテの之を歌はんとして出づる處の囃をも次第といふ。高砂田村江口船辨慶の類。多くのものにあり。是に二段三段五段などの別あり。次第の文句はワキ又はシテ之を歌へば。地謠低音にて同じ文句を繰返す。之を地次第とも地取ともいふ。

地次第　地取

脇能には三返がへしなどいふ事あり。本書高砂の處にいふべし。すべて大小鼓を主として笛はあしらふのみ。

名乘笛

名乘笛

次第なくして直に名乘をするワキの出づる時にあしらふ笛を。名乘笛といふ。野宮二人靜道成寺などにあり。大小鼓も太鼓もあしらはず。

一聲

一聲

舞臺に出づるや直に其事もしくは其情其景などを歌ひ出すやうの文句を。一聲と名づけ。之を歌ひ出さしむるまでの囃子をも又一聲といふ。高砂乘平花籠などのシテの出。土蜘張良大江山などのワキの

出にあるもの是なり。中にも本脇能の高砂養老や。本三番目の松風などには。眞の一聲とて。橋掛に歌ひ出す作法あり。從ひて鼓の打方も習とす。大小鼓主にて笛はあしらふのみ。

眞の一聲

出端

出端

一聲に似て太鼓の入りたるものを出端といふ。又これを太鼓の一聲ともいへり。加茂朝長龍田融などの後ツテの出など是なり。歌ひ出しはシテよりするもツレよりするもワキよりするも地よりするもあり。地よりするものを除きては。其歌ひ出しの詞を和歌といふ。笛のあしらひなる事一聲に同じ。

和歌

早笛

早笛

鬼神龍神または戰場に急ぐ人など總べて早きものゝ出づる時に用ふる囃子を早笛といふ。船辨慶小鍛冶鉢木などの後ツテの出にあり。笛を地として大小鼓太鼓之に伴なふ。

大癋

大癋

早笛に似て位靜なるものを大癋といふ。大癋は天狗の着る面の名なれば。鞍馬天狗善界などの出づる時に用ふる故の名なり。昔は靜なる早笛ともいひたるが如し。笛地となりて三拍子之に伴なふ事早笛に同じ。但し天狗のみに限らず。玉井の海神。皇帝の鍾馗などにも用ふるは。位も面がらも似たるものなればなり。

下羽

下羽

舞ひながら出づるやうのものに用ふる囃子を下羽といふ。西王母嵐山猩々など是なり。笛地となりて三拍子之に伴なふ。その掛りに渡拍子といふ太鼓の手あり。

來序

帝王または神躰天狗など殊に重しとせらるゝものゝ進退に用ふる囃子を。來序といふ。咸陽宮鶴龜などのシテの出。白樂天鞍馬天狗など

末社來序　どのシテの中入する時などにあり。三拍子ありて笛これをあしらふ。間の末社の出づる時のも來序といへど。是は末社來序と稱へて位早く打方も異なり。

亂序　獅子の出づる時に用ふる囃子を亂序といふ。望月石橋にあり。三拍子主となりて笛これをあしらふ。

あしらひ出し　あしらひ皷

あしらひ出し　シテの出づる時。皷のみにて其歌ひ出すまであしらふものあり。之をアシヒ出しともアシラヒ皷ともいふ。熊野砧などのシテの出に用ふ。

早皷　早打などの如きものゝ出づる時に用ふる大小皷を早皷といふ。鉢木土蜘などの類にあり。笛はなし。

祝詞　神佛に祈禱する文句の掛りに用ふるものをノットといふ。小鍛冶葵上安宅などにあり。笛と二拍子又は三拍子と之を囃す。

舞　謠の文句なき間に笛の曲に他の拍子を加へて舞ふ處あり。之をマヒと稱ふ。種々あり。

序の舞　其一を序の舞といふ。位靜にして舞のかゝりに序といふものあり。羽衣杜若雲林院の類は太皷のあるものにて。江口井筒楊貴妃の類は太皷なし。

眞の序　其二を眞の序といふ。序の舞の今一層位しづかなるものあり。きはめて老躰なる神人の舞ひ給ふ時に用ふ。老松放生川白樂天雨月にあり。何れも太皷あり。

中の舞　其三を中の舞といふ。その位靜に過ぎず早きに過ぎず。中を得たるもの。

故の名なり。熊野松風紅葉狩船辨慶は太鼓なく。右近胡蝶西王母は太鼓あり。

天女の舞

其四を天女の舞といふ。中の舞と大方同一なれども。神能などにてツレの天女の舞ふ曲なれば特に此名あり。加茂嵐山竹生島などにありて。三段の舞とも稱ふ。太鼓あり。

破の舞

其五を破の舞といふ。中の舞よりは位早く簡單なるものあり。羽衣の「なびくもかへすも舞の袖」のあと。松風の「いざ立ちよりて磯馴松のなつかしや」のあとなどにあり。太鼓のあると無きとあり。

早舞

其六を早舞といふ。位の早きものなれば此名あり。融海人絃上當摩

黄鐘早舞

などにて何れも太鼓を用ふ。松虫錦木などのは黄鐘の早舞と稱へて一種別なり。太鼓なし。

急の舞

其七を急の舞といふ。位の極めて急なるものにて道成寺亂拍子のあとにあり。是には太鼓なし。觀世流にては綸旨の力神の舞にもあり

男舞

て。是には太鼓を用ふ。

神舞

其八を男舞といふ。長絹素袍直垂法被篠懸など着たる直面の人の舞ふ曲にて。小督薩州安宅七騎落などにあり。太鼓なし。

神樂

其九を神舞といふ。神躰の出現して舞ひ給ふ曲なり。高砂弓八幡養老などの類にて太鼓あり。

翔鼓

其十を神樂といふ。神子もしくは女躰の神の舞ひ給ふ曲なり。これに序のあるとなきとありて。三輪龍田などは序あり。卷絹は序なし。何れも太鼓を用ふ。

鞨

其十一を樂といふ。伶人の舞樂に擬したる曲なり。邯鄲唐船枕慈童の類は太鼓あり。天鼓梅枝富士太鼓などはこれなし。

熊の舞

其十二を羯鼓といふ。胸につけたる羯鼓を撥にて打ちつゝ舞ふ曲なり。自然居士花月放下僧などにありて太鼓なし。

其十三を熊の舞といふ。神樂(カグラとは異なり)ともいへり。熊の舞

ふものにて小皷に笛のあしらひあるのみ。大皷も太皷もなし。

千歳の舞

其十四を千歳の舞といふ。千歳の舞ふものにて翁の曲の内にあり。大皷も太皷もなき事翁の舞に同じ。

亂

其十五を亂といふ。興じ亂れて舞ふこゝろにて。猩々と鷺との二番にあり。笛の譜は二番とも別にて。甲を猩々亂といひ。乙を鷺亂といふ。何れも太皷あり。

獅子舞

其十六を獅子舞といふ。獅子の戯むれ狂ふさまに擬したる曲なり。望月石橋にあり。太皷を用ふ。金剛流にては内外詣といふものにもあり。

亂拍子

其十七を亂拍子といふ。道成寺にあり。小皷一調の曲あり。觀世流にては草子洗にも亂拍子を用ふる習あり。

舞働

舞にはあらざれども。謠の文句の切れたる間に活潑飛躍の所作擧動をあらはすものなり。舞働またはハタラキといふ。船弁慶の「前後を忘ずるばかりなり」のあと。紅葉狩の「おもてを向くべきやうどなき」のあと。などにあるものなり。四拍子あり。

翔

舞働に似て太皷なく。所作活潑にして合戰狂亂などのさまをあらはすものあり。翔と名づく。田村八島雲雀山蟬丸などにあり。通例は太皷なけれど。山姥と阿漕とには山姥と阿漕とは寧ろ立廻と名づくべきものにはあらぬか。

祈

惡魔のあらはれて僧または山伏に祈り伏せらるゝ處の形を祈といふ。道成寺葵上安達原(黑塚とも)などにあり。四拍子を用ふ。

立廻

舞にもあらず。働にも翔にもわらずして。たゝ立ち廻るやうなる形

のものを立廻といふ。紙絹の「しやう〳〵てんは」の前。百萬の「あら我子こひしや」のあとにあるもの丶如き是なり。太鼓は有るも無きもあり。

イロヘ

立廻に似てはあれども。多くは位靜にて。角取りて一つ舞臺を廻り。サシ又はクリなど歌ひ出だす處にあるものを。イロヘといふ。杜若の「袖を都にかへさばや」のあと。船辨慶の「袖うちふるもなつかしや」のあとなどにあるもの是なり。太鼓なし。大小鼓に笛のあしらひあるのみ。

幕

善界の「是を不動と名づけたり」のあと。舍利の「もとの下界におつくだす」のあと。などの類をもイロヘといへど。是等は舞働または立廻に入るべきものかとの疑あり。但し是等の類は太鼓を用ふ。

役者の出入には幕を上げおろしす。之を全く上げるを本幕といふ。常にシテワキツレなどの出て入る時に用ふるもの是なり。之を半分上げて幕の中に居るシテの下半身あらはすを半幕といふ。望月石橋船辨慶の前後替などにあり。之を上げずに左の方を出入するを片幕といふ。囃子方または語間などの出入にするなり。

面

シテとシテヅレとの顔に掛くるものをオモテといふ。其概略を擧ぐれば左の如し。

附面

白式尉……翁。　小尉……高砂弓八幡の類。
朝倉尉……白樂天竹生島の類。　小牛尉……養老春日龍神の類。
笑尉……融阿漕兼平の類。　三光尉……八島忠度の類。
皺尉……輪藏西行櫻の類。　石王尉……放生川老松の類。

能のしなり　一の卷

能面

男面

総既面

惡尉……源太夫の類。
若荷惡尉……張良雅覺の類。
重荷惡尉……懋重荷。

姥面

姥……高砂のツレの類。
山姥……山姥。

男面

中將……通盛雲林院の類。
邯鄲男……高砂弓八幡の類。
頼政……頼政。
童子……天蛾の類。
痩男……阿漕通小町の類。
十六……敦盛經政の類。

鼻瘤惡尉……玉井大社の類。
大惡尉……玉井氷室の類。

老女……當麻卒都婆小町の類。

平太……箙兼平の類。
蛙……阿漕善知鳥の類。
俊寛……俊寛。
慈童……田村小鍛冶の類。
若男……女郎花の類。
今若……經政知章の類。

女面

大喝食……自然居士の類。
粟男……志賀頃羽の類。
景清……景清。

女面

小面……熊野松風の類。
深井……隅田川富士太鼓の類。
曲見……百萬柏崎の類。
痩女……定家砧の類。
橋姫……鐵輪の類。
增髮……玉葛の類。

神佛仙人の面

大天神……藍染川の類。
三日月……養老の類。

小喝食……花月の類。
蟬丸……蟬丸。
弱法師……弱法師。

若女……同上。
增……羽衣立田の類。
近江女……安達原海人の類。
生成……鐵輪。
泥眼……葵上の類。

小天神……舍利の章駄天の類。
不動……調伏曾我檀風。

雷……雷電。

鬼畜天狗の面

般若……葵上道成寺の類。

獅子口……紅葉狩土蜘の類。

大飛出……嵐山江島の類。

熊坂……熊坂烏帽子折。

猿癇見……鵺の類。

小癇見……皇帝昭君の類。

野干……小鍛冶の類。

類……殺生石の類。

眞蛇……道成寺。

猩々……猩々大瓶猩々。

獅子……石橋。

釣眼……加茂嵐山の類。

小飛出……小鍛冶鵺の類。

長靈癇見……熊坂第六天の類。

大癇見……鞍馬天狗善界の類。

黑髭……春日龍神岩船の類。

鷹……鵺の類。

怪士……船辨慶の類。

鷲……鷲。

一角仙人……一角仙人。

右の外にも猶さま〳〵あれど。さのみはとて略しぬ。

裝束

役者の身に着くる服裝を裝束といふ。其概略左の如し。

烏帽子

翁烏帽子……翁の着用する黑の立烏帽子。蟻通などにも用ふ。

小立烏帽子……翁烏帽子の少し低きもの。歌占などに用ふ。

風折烏帽子……立烏帽子の上を横に折りたるもの。黑風折と金風折との二種なり。七騎落の頼朝船辨慶の判官などに用ふ。

靜烏帽子……立烏帽子の一種。靜などやうの白拍子の舞ふ時に用ふ。黑と金との二種あり。

前折烏帽子……又一種。百萬などに用ふ。

大臣烏帽子……大臣脇の着用するもの。高砂弓八幡などに用ふ。

能のしをり　一の卷

梨子打烏帽子……具足姿の武士の着るもの。兼平巴などに用ふ。
折烏帽子……直垂素袍などに着するもの。夜討曾我などに用ふ。侍烏帽子ともいふ。
小結烏帽子……子方の着る侍烏帽子。組緒を附く、烏帽子折などに用ふ。

冠

冠……垂纓と卷纓との二種あり。融絃上などのは垂纓にして井筒杜若などのは卷纓なり。老懸を附く。
透冠……神体の着る冠。高砂弓八幡などに用ふ。
唐冠……唐人の着る冠。鶴亀西王母などに用ふ。
鳥甲……樂人の着るもの。富士太鼓などに用ふ。

天冠

天冠……天女神女貴女などの戴く冠。羽衣龍田楊貴妃など。金の瓔珞垂れたり。能により櫻藤蓮花蔦紅葉などを挿す事あり。
龍立……龍神などの戴く龍のかぶり物。小鍛冶殺生石の狐。龍虎の龍虎。鶴亀の鶴亀なども。名こそかはれ之に擬す。
鐵輪……鐵輪のシテのいたゞくもの。ゴトクの足に火をともしたる形。

頭巾

長範頭巾……熊坂正尊などに用ふるもの。
頼政頭巾……頼政に用ふるものなり。
輪藏頭巾……輪藏に用ふるものなり。

能のしなり　一の卷

兜巾

大兜巾……天狗の頭にいたゞくもの。鞍馬天狗などに用ふ。

兜巾……山伏の額にあつるもの。安宅などに用ふ。

帽子

角帽子……普通の僧脇のかぶる尖りある帽子。田村松風のワキなどに用ふ。

沙門帽子……角帽子に似て着用法少し異なり。角帽子よりは品位ある僧に用ふ。正尊の前など。

花帽子……大原御幸攝待のシテなどの頭を包むもの。

鉢巻

鉢巻……梨子打烏帽子を着する時に用ひ。又これのみ用ふるものあり。子方は色あるものを用ふ。

兜巾　帽子　鉢巻

頭

黒頭……田村の童子船辨慶の知盛などのかぶる黒の髪毛。船辨慶のシテ羅生門のワキなどは之に鍬形を附く。

赤頭……鵺土蜘などのかぶる赤の髪毛。

白頭……鬼畜天狗類の老躰のものゝかぶる白の髪毛。殺生石鞍馬天狗などに用ふる事あり。

垂

黒垂……透冠天冠梨子打烏帽子などかぶりたる時兩鬢に垂らす髪毛。高砂經政ツレの天女などに用ふ。

白垂……右の老體なる時に用ふる白髪。雨月又は七騎落の岡崎などに用ふ。

龍のしなり　一の巻

葛

葛……葛は假字なり。鬘と書く方眞字に近からん。女ものゝ頭にかぶる髪なり。熊野松風などに用ふ。

長葛……葛の長く垂れたるもの。天人などに用ふ。平元結を附くるあり。

尉髪……老翁の結髪したる白髪。高砂謡などに用ふ。

老髪……老女の用ふる葛。

葛帯……葛したる時に之をしむる紐。端は後に長く垂れて装飾あり。

バサラ……放髪したる唐人姿の髪に附くる装飾。咸陽宮猩々のワキなどに用ふ。

髪

放髪……結髪の時代に髪を放して後にはねたる頭。

散髪……同じ時代に元結を取りサバク髪になりたる頭。

自髪……結髪したる自身の髪のまゝの姿。

顔

直面……面を着けざる顔。

衣

狩衣……高砂のワキ又は後ツテなどの上に着る衣。單と袷との二種ありて。兩袖にはッユを垂る。

長絹……羽衣のシテ正尊の判官などの上に着る衣。袖にッユあり。胸に紐あり。

舞衣……梅枝富士太鼓のシテなどの上に着る衣。長絹に似て前と後とつながりたり。

水衣……高砂の前ツテ松風のシテの類。又は僧侶の人能のしなり一の型

の着る衣。之にシケとヨリとの二種あり。

法被……八島の後ッテ。殺生石の後ッテなどの着る衣。鎧の時にはいつも之を用ふ。

側次……鉢木の後ッテ。猩々のワキなどに着る袖のなき衣。

直垂……安宅のワキなどに用ふるもの。袴も揃へて用ふるを直垂上下といひ。上のみ用ふるを掛直垂といふ。

素袍……鉢木の前ジテなどに用ふるもの。袴も揃へて着るを素袍上下といひ。上のみなるを掛素袍といふ。

唐織……熊野千手などのシテの着る衣。

厚板……望月の後ジテのかぶりて出づる衣の類。

箔……女ものゝ着附に用ふるもの。摺箔縫箔の二つあり。

白練……翁の着附に用ふるもの。

白綾……通小町などの着附に用ふるもの。

熨斗目……段熨斗目は鉢木望月などのシテの着附に用ふ。無地熨斗目は僧脇の着附などに用ふ。

くわら……袈裟なり。盛久邯鄲などに用ふ。

篠懸……山伏の前うしろに懸くるもの。優頭の如き飾あり。

大口……蘆刈安宅などのシテの着る無地の袴。白地と色地とあり。女は赤地萠黄地紫地などを用ひ。老女は淺黄地を用ふ。

半切……大口と同じくして金襴などの模様あるもの。

能のしなり　能の一

指貫　腰卷　腰袋　腰帶　袴流　坪折　モギドウ

指貫……船辨慶の後ヲテなどに用ふ。皇族公卿の袴なり。大原御幸の法皇。蟬丸のツレなどに用ふ。

腰卷……女ものゝ腰より下に纏ふ衣。羽衣松風などすべて着流しの時に用ふ。

腰袋……腰に着くる袋。阿漕俊寛の類。漁夫または水汲むシテなどに用ふ。

腰帶……腰に結びて前に垂らしおく上帶。垂れたる處には短冊のやうなる飾あり。

着流……袴なきをいふ。

坪折……唐織水衣などを帶の處にて折り廣げ袴の上に着るを云ふ。

モギドウ……着附に袴または腰卷のみにて。狩衣長絹水衣法被等すべて何も用ひぬをいふ。鉢木の後ジテ通小町のシテなどに用ふ。

着附……狩衣長絹唐織水衣などの下に着る衣なり。箱白練白綾熨斗目厚板などを總べていふ。

普通ならぬは省きたるも多し。

作物

舞臺に持ち出だして据ゑ置く道具立を作物といふ。もとより能は芝居の如く。舞臺一面その景色を現ぜしむるものにはあらず。たゞ役者の所作に關して必要なるもの。もしくは文句のみにては聊か物足らぬ心地するものを用ふるに止まるなり。かの羽衣を掛けおくがために松の作物を出だし。海上と船中とを區別するがために船辨慶の舟を出だすの類にて知るべし。その概略は左の如し。

山……竹にて作り引廻しを掛けたるもの。上に柴を挿して

野守氷室などに用ふ。隅田川遊行柳には柳の枝を。紅葉狩には紅葉を。石橋には牡丹を。龍虎には竹を挿すもあり。引廻は始終かけておくと半にて取るとあり。

宮……社殿の形に作れるもの。竹生島和布刈などにあり。

屋臺……家に模して作れる者。屋根あり鶴亀那鄙などに用ふ。

庵……草庵に模して作れるもの。屋根なし。扉あるもなきもあり。安達原梅枝などに用ふ。

藁屋……藁屋根を附けたる庵。蟬丸などに用ふ。

籠屋……獄屋に擬して作れるもの。籠太鼓に用ふ。

半蔀……扉を押し上ぐるやうに作れるもの。半蔀に用ふ。

輪藏……佛寺の輪藏に擬したるもの。ぐる〳〵廻るやうに作る。輪藏の能にあり。

巣……蜘蛛の巣に擬して作れるもの。山に巣の形を紙にて切り附く。土蜘にあり。

石……石の形に作り中より二つに割るゝやうにしたるもの。殺生石一角仙人にあり。

車……牛車に擬して作れるもの。熊野右近などに用ふ。屋形あり轅あり左右に輪あり。

井筒……井桁に擬して作れるもの。井筒に用ふ。一方に薄の作花を附く。

鳥居……鳥居の形に作れるもの。野宮に用ふ。

片折戸……扉あり袖垣あり。小督に用ふ。

燈臺……天地の兩燈を供へおく臺。白鬚に用ふ。

篝臺……船に篝火を燒き置くもの。通盛に用ふ。

鳴子……船に飾りおく鳴子。鳥追に用ふ。

鉢木……植木鉢に擬しかるもの。鉢木に用ふ。松と枯枝とを挿す。

鏡臺……鏡を載せおく臺。皇帝昭君などに用ふ。

機……呉服に用ふ。竹にて作り紅絲を絲に代用す。

翔鼓臺……樂太鼓に擬したるもの。天鼓富士太鼓などに用ふ。翔鼓を太鼓に代用して載せおく故の名。

鐘……釣鐘の形に作りて舞臺の天井に釣るもの。道成寺に用ふ。綱は箱柱の鐶に結びおく。

鐘樓……鐘撞堂に擬して作れるもの。三井寺に用ふ。小さき鐘を釣り鐘木を添へ綱を附けおく。

砧……砧の形に作れるもの。砧に用ふ。白水衣を卷きつけておく。

ワクカセ……絲くる臺。安達原に用ふ。

矢臺……矢を立てておく臺。加茂に用ふ。

供物棚……神に供ふる供物を載せおく棚。鐵輪に用ふ。注連を引き五色の幣を飾る。

酒壺……猩々に用ふ。おほひあり。

立木……松をば羽衣に用ひ。櫻をば嵐山に用ひ。牡丹をば石橋に用ふるの類。

舟……船辨慶竹生島などに用ふ。唐船の船は引廻しを繞ひて帆柱と帆とを附け。江口には屋形あり。通盛には篝火あり。鳥追には鳴子あり。

引廻……山宮庵などの類に引き廻しおく幕の如きもの。

一疊臺……一疊の廣さなる臺。土蜘舍利などに用ふ。掛けたるきれを臺掛といふ。

あまり常に用ひぬものは略せり。

小道具

役者の手に取り用ふるものを小道具といふ。その大よそを左に示す。

扇……末廣と中啓との二種あり。末廣は素袍上下着たる男の携ふるもの。その他はすべて中啓を用ふ。中啓には翁扇。神扇。尉扇。修羅扇。男扇。僧扇。山伏扇。葛扇などの別あり。

唐團扇……唐人の手に持つ團扇。唐船邯鄲などに用ふ。

羽團扇……羽根にて作る。天狗の持つもの。

箒……柄の先に杉葉を附けたるを杉箒といひ。萩の枯枝にて作れるを萩箒といふ。

さらへ……松葉掻なり。高砂に用ふ。

いぶり……雪掻なり。氷室に用ふ。

釣竿……絲を卷き附く。八島羽衣などに用ふ。

棹……舟をやる棹なり。竹にて作る。兼平鵜などに用ふ。

杖……竹にて作る。老人盲人などに用ふ。

鹿脊杖……握りの鐘木になりたるもの。山姥などに用ふ。

打杖……鬼などの手に持つ鐘木の如きもの。

鞭……竹にて作る。小督鉢木などに用ふ。

幣……神職神子神体などの手に持つ御幣。

草……竹に挾みてかたげ出つる草。天然の石菖檜扇などを用ふ。木賊敦盛などにあり。挾む竹を草挾みといふ。

花……草の如く竹に挾みたる花。生花をも作花をも用ふ。雲雀山項羽などにあり。

折枝……手に持つ木草の枝。作花なり。西王母の桃花。三山の櫻の類。

木の葉……手に持つ小枝なり。三輪采女などに用ふ。又逆鉢金能のしをり　一の卷

札などにては榊の折枝をかたげて出づるもあり。

笹……狂女の持つ竹の枝。持笹とも狂笹ともいふ。

錦木……紅綾にて巻き美しくしたる木の枝。錦木に用ふ。

花籠……竹にて作る。花籠通小町などに用ふ。

松明……萩を束ねたるものに赤き麻を附けて火とす。

鎌……海人和布刈などに用ふ。

網……櫻川に用ふるはすくひ網とて小さく。阿漕に用ふるは置網とて大きなり。

槌……刀を鍛ふ槌。小鍛冶に用ふ。

水桶……水汲む桶。俊寛松風などに用ふ。

田子……竹にて両方に荷なふ水桶。融絃上などに用ふ。

汐汲車……水桶を載する小さき車。松風に用ふ。網を附けたり。

網……細引なり。唐船の牛綱。夜討曾の捕縄などに用ふ。

小刀……腰にして出づる短刀。

太刀……佩きて出づるもあり。持ちて出づるもあり。飾太刀と野太刀との別あり。

長刀……巴熊坂などに用ふ。

鉾……逆鉾項羽に用ふ。

剣……鍾馗咸陽宮などに用ふ。

弓……白竹にて作る。弓八幡にては袋に入る。

矢……白竹にて作る。紙の羽を附く。

文……奉書を折りて用ふ。熊野俊寛などにあり。

短冊……奉書にて作るも又正物を用ふるもあり。熊野草子洗などに用ふ。

草子……綴本の形に作るもの。草子洗に用ふ。

経文……経巻の形に作れるもの。海人などに用ふ。

能のしなり　一の巻

卷物……經文に同じ安宅張良などに用ふ。

守……守札を袋に入れたるもの。夜討曾我などに用ふ。

文臺……短冊を載する臺。竹にて作り紅綾を卷く。草子洗にあり。

經箱……經を入るゝ箱。輪藏に用ふ。

數珠……僧の持つもの。山伏の持つをばイラタカと稱ふ。

羯鼓……胸に附けて打つ鼓。撥あり。花月自然居士などに用ふ。又羯鼓臺の上に載せ。鳥追にては船に飾らる。

琵琶……絃上などに用ふ。

舍利……舍利を入れたるものに擬して寶珠の玉のやうに作る。舍利にあり。

玉……竹生島岩船などに用ふ。

鏡……鏡の形に作れるもの。野守は手に持ちて出で。昭君などのは臺の上に載す。

釣針……大きく作りたるもの。玉井に用ふ。

桃の實……西王母に用ふ。

氷……氷の塊に擬したるもの。木にて平たく作り銀紙を張る。氷室に用ふ。

重荷……戀重荷に用ふるもの。

枕……邯鄲などに用ふるもの。

金札……金札の形に作れるもの。羅生門などに用ふ。

龍燈……白鬚九世戸などに用ふ。

天燈……白鬚九世戸などに用ふ。

巢……土蜘に用ふ。紙を細く切りて手に持ち投げかくるもの。

負柴……脊負ふ薪。萩の枯枝をたばねて作る。能によりて菊能のしなり　一の型

櫻など折り添ふるもあり。葛城には雪を掛くるもあり。兼平には負はずして船に結びつく。

笠……黒塗なり。男笠と女笠との別あり。

傘……蟻通に用ふ。爪折なり。

葛桶……腰掛に用ふる桶。床几ともいふ。又腰桶ともいふ。

床几……軍陣にて用ふる床几。八島の弓流に用ふ。

流儀々々の相違などは書きつくしがたし。本文に出てたるはそこにて言はん。

替の形

同じ太夫の同じ能を度々するも珍らしからずなど思ふ所より。少し趣向を替へたる所作をなす事あり。名づけて替の形といふ。替の形をする時は。前以て之を番組の曲名の左の方に小書するが故に。これを小書物ともいふなり。種々ありて家々の秘傳とする事なれども。

その要領を摘みて示せば左の如し

所作の替

所作に就きて名づけたるもの。

梓の出(砧葵上)　膝行(熊野)　見留(松風)
合掌留(野宮)　霞隱(羽衣)　木葉之傳(俊寛)
鉦之打方(隅田川)　山端之出(夕顏)　露之拍子(芭蕉)
來迎拍子(誓願寺)　蛍間之拍子(善界)　波間之拍子(船辨慶)
前後(船辨慶)　白波之傳(船辨慶)　弓流(八島)
天地之聲(野守)　千筋之傳(土蜘)　入違之傳(土蜘)
扇之形(橋辨慶)　長胡床(田村兼平實盛)　瀧流(安宅)
空之祈(葵上)　笹之傳(班女)　雨夜之傳(通小町)

舞の能

舞の類に就きて名づけたるもの。

移神樂(龍田)　五段神樂(龍田卷絹)　神遊(三輪)
岩戸之舞(三輪)　誓納(三輪)　大和舞(葛城)

能のしなり　一の卷

素働(加茂)　水波之傳(養老)　戀之舞(杜若)
澤邊之舞(杜若)　弄月之舞(姨捨)　和合之舞(羽衣猩々亂)
彩色之傳(羽衣等)　戲之舞(松風)　亂拍子(草子洗)
移舞(住吉詣)　村雨留(熊野)　讓次之傳(熊野)
盲目之舞(弱法師)　青柳之舞(遊行柳)　現之樂(富士太鼓)
狂亂之樂(富士太鼓)　杖之舞(西行櫻)　弄鼓之樂(天鼓)
法樂之舞(百萬)　雪月花之舞(山姥)　醉中之舞(一角仙人)
勸盃之舞(松虫)　延年之舞(安宅)　二段之舞(敦盛)
忍辱之舞(自然居士)　恐之舞(七騎落小督滿仲盛久)
愁傷之舞(滿仲)　遊舞之曲(菊慈童)　解脫之舞(海人)
懷中之舞(海人)　龍女之舞(春日龍神)　笏之舞(融)
酌之舞(融)　曲水之舞(融)　遊曲之舞(融)
舞返(融)　十三段之舞(融)　寇(融紘上海人當麻)

師資之傳(石橋)　大獅子、石橋)　連獅子、石橋)
亂(猩々)　雙之舞(猩々)　二人猩々(猩々)

笛鼓太鼓の曲に就きて名づけたるもの。

戀之音取(清經)　披講之音取(清經)　平調返(江口等)
干之掛(楊貴妃等)　大返(花筐等)　雙調之舞(弱法師)
盤涉之樂(邯鄲等)　盤涉之舞(羽衣等)　懺法(朝長)

裝束の替

裝束の變改に就きて名づけたるもの。

白式(田村融等)　黑頭(小鍛冶安達原等)赤頭(海人道成寺等)
白頭(望月殺生石等)　替裝束(卷絹雷電等)

作物の替

作物の變改に就きて名づけたるもの。

玉簾(楊貴妃)　立花供養(半蔀)　盃壺之傳(亂)

役者の替

役者の變改に就きて名づけたるもの。

紅梅殿(老松)　女體(繪馬竹生島)　龍神揃(春日龍神)

能のしかり　一の卷

鬼揃(紅葉狩)　天狗揃(鞍馬天狗)　天人揃(吉野天人)

文句の變改に就きて名づけたるもの。

外の濱風(菩知鳥)　安閑留(花筐)　笛之卷(橋辨慶)

ワキに就きて名づけたるもの。

脇能之式(竹生島等)　脇留(種々あり)

また能が替の形を用ふる時は。アヒの狂言も替の形の有るものは替間にする習なり。二つ三ついはゞ。

鶯蛙(白樂天)　道者(白髮江島)　猿聟(嵐山)　神子神主(大社)

鱗(和布刈)　御田(加茂)　神職(御裳濯)　町稔(春日龍神)

奈須語(八島)　船唄(船辨慶)　藥の水(養老)　鬼(紬馬)

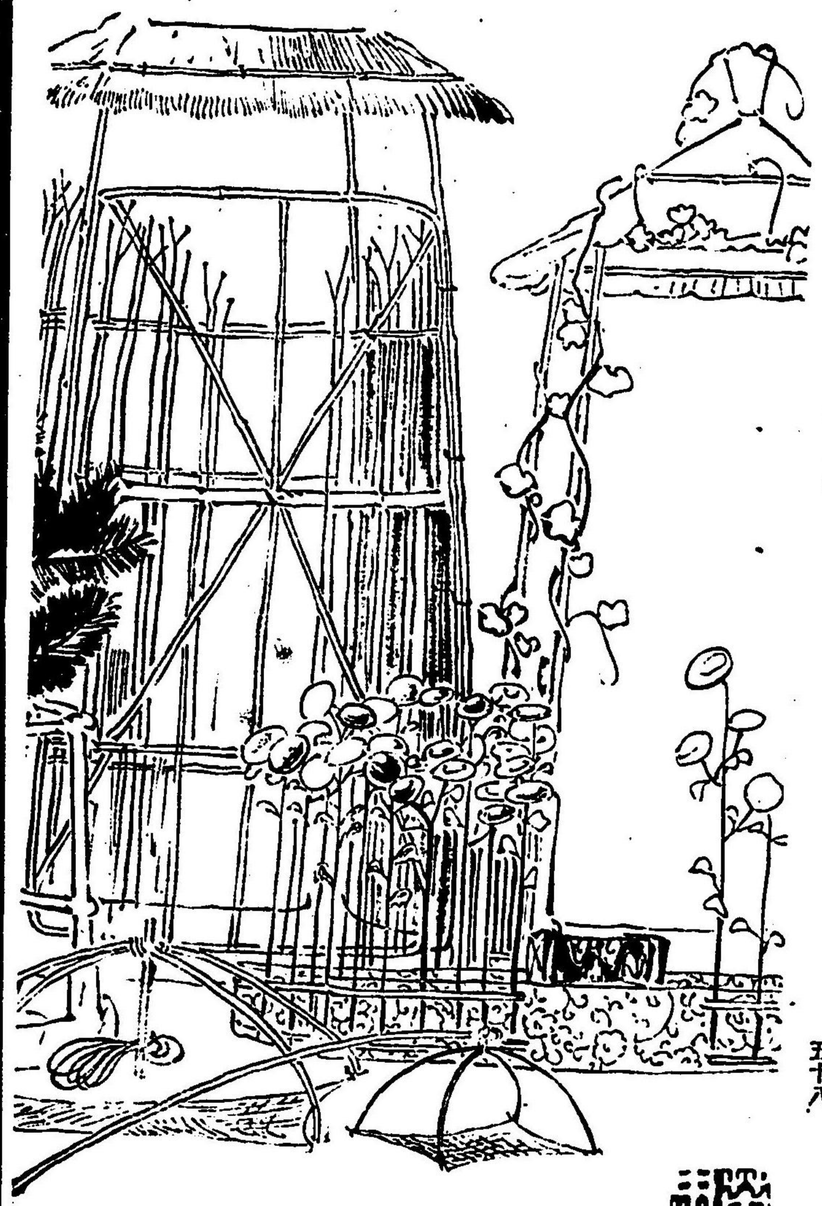
鉢叩(輪藏)　大藤內(夜討曾我)　弦師(橋辨慶)　桃仁(西王母)

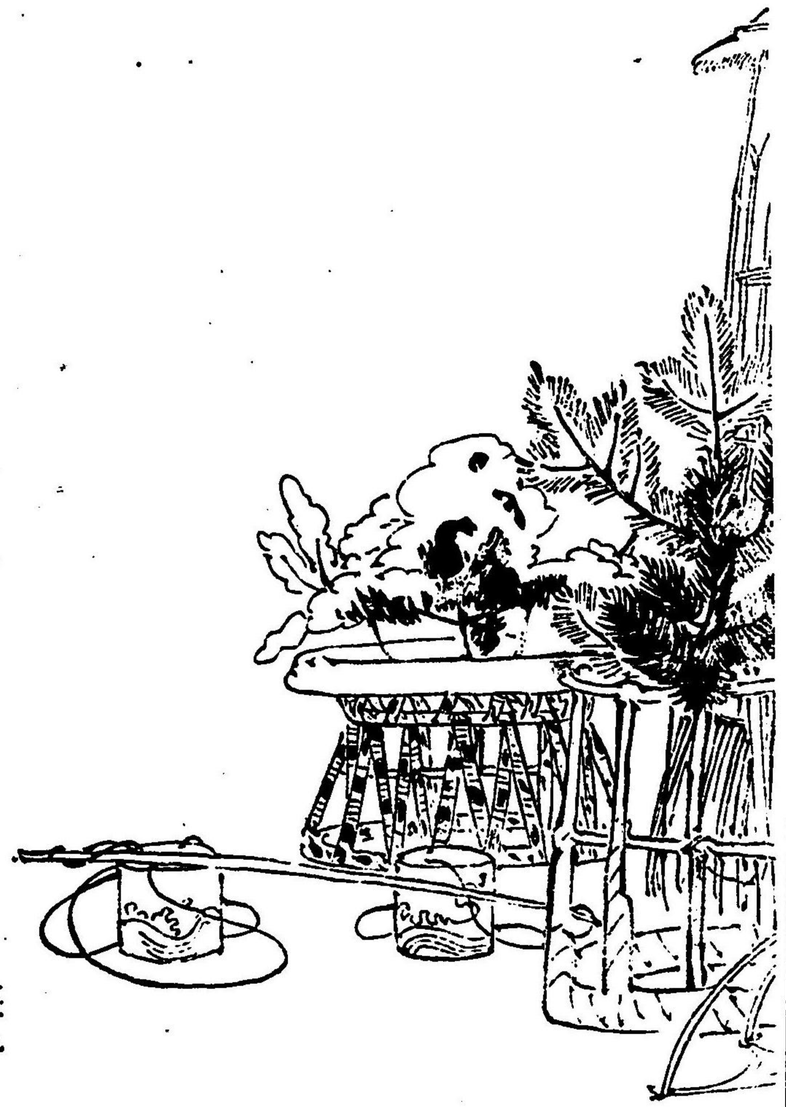
などの類。時に取りては興味ふかゝらん。されどもいつも〳〵替の形替の間といふやうになりては。美味も三度々々はの諺の如く。却りて淡泊のものを望むに至るは當然の事なり。近頃のやうに重き習事の能も替の形も。湯水の如く不斷におろさるゝはちと心すべき事ならずや。

囃子と仕舞

以上述べたる處は能の事なり。今一つ終りに臨みて言ひおきたきは。囃子と仕舞なり。

囃子とは常にしば〳〵四拍子の事を意味して用ひらるれど。こゝに言はんとするは四拍子もて囃し立てらるゝ一種の曲を指すものにて。謠一番に四拍子を加ふるを番囃子といひ。また一定の規則ある一二段を抜きてするを單に囃子と稱ふ。之に二種あり。謠のみに四拍子あるを居囃子といひ。シテ立ちて舞ふものを舞囃子といふ。通例舞臺にても座敷にても行はるゝは此舞囃子なれば。遂に囃子といへば。舞囃子を意味する事となりにけり。囃子の能と異なる點左の如し。





一　シテ裝束を用ひず。舞袴にて舞扇を持つ。但し上下の事もあり。

二　作物を用ひず。小道具は杖長刀床几の外になし。

三　ワキをもツレをもアヒをも用ひず。シテ一人にて舞ふなり。ワキ等の文句ある時は地謠にてあしらふ。但しワキを地謠の上にすわらせて謠だけ歌はする事はあり。

四　橋掛より出てず。シテも地も四拍子も切戸より出て、着席し。シテ又はワキより歌ひ出だす。

仕舞はもとは能の所作をいふ名稱なれど。今は能の中の一小部分を。四拍子なく地謠のみにて舞ふものをいふ事となれり。但し物によりツレ又はワキ又は子方を使ふ事もあり。仕舞の囃子と異同の點左の如し。

一　裝束を用ひざる事囃子に同じ。

二　作物を用ひず小道具の内杖長刀を用ふる事囃子に同じ。

三　物によりてはワキ(大蛇)又はツレ(土蜘)又は子方(橋辨慶)を用ふるものあり。

四　切戸より出て、シテまづ歌ひ出す事囃子に同じ。但し囃子は四拍子眞向に座し。シテと地謠と角掛けて斜に(流儀によりては地謠は横向)着座すれど。仕舞は四拍子なければ。シテと地謠と眞向にすわる。

五　仕舞には四拍子なければ。舞カクリ働などの類はすべてなし。

六　仕舞は更に囃子よりも。簡單なり。

之を繪にたとへば能は極彩色。囃子は水彩色。仕舞は墨畫を見るに似たり。上手のわざを見る時は。何れ優れり劣れりはいふべからず。されど能の間に仕舞を見るは。紅葉を出て、細谷川に向ふが如く。

素謠の後に囃子を見るは。枯野の末に山茶花を得たるが如くならん。

翁

翁

烏帽子　白練袈裟　指貫　狩衣　腰帶　扇　後に白式尉

千歳（下懸にては狂言）

折烏帽子　直垂　大口　厚板若附　小サ刀　神鈴

三番叟（狂言）

折烏帽子　直垂上下　厚板若附　扇　後に飾先烏帽子　黑式尉　鈴

面箱

千歳に同じ。

翁は天照大神に擬し。千歳は八幡大神に擬し。三番叟は春日明神に擬すなどいいひて。此道には神聖最第一のものとし。之を勤むる役者は前以て別火潔齋し。當日は樂屋に翁飾と稱へて。

能のしかり　一の卷

翁の有無

千歳

面箱

神歌

翁

翁の面を神体の如く安置し。神酒を供へて舞臺に出づる人々一同に之を戴き。特に身を清め心に誦文など唱へてするなり。されば之を其日の能の最初に置き。二日ありても三日ありても。必ず其日毎に演じたるものなりしが。近來は略して其都度々々にはせず。新年の能始もしくは祝典法會等の廉ある折にのみ用ふる習慣となりたる如し。

番組に翁の太夫の名を記さゞる時は。次の脇能のシテが之を勤むるなり。

上懸(觀世。寶生)にては千歳をシテのツレにて勤むれども。下懸(金春。金剛。喜多)にては狂言方にて勤むるが故に。千歳すなはち面箱を持ちて出づれば。別に面箱の役を置かず。

觀世流にては。能の時翁と稱すれども。謠の文句をば神歌と稱ふ。故に謠本の標題には神歌としるせり。

幕上る

おの〳〵着席す

幕あがると面箱の役者兩手にて恭しく面箱を捧げて出で。續きて翁。千歳。三番叟と順々に出て。囃子方。太夫の後見。地謠。狂言の後見に至るまで。跡につゞきて橋掛に出てならぶ。翁は舞臺に入り正面先に進み下に居て拜禮をなし。膝立てかへて地謠座の前に至り。目附柱の方に向ひて片膝ドンと突き安座すると。目附柱の方に控へ居たりし面箱の役者は。太夫の前にゆきて面箱を下に置き。箱の紐を解きて蓋を仰向け。白式の翁の面を出だして之に載せ。直垂の左右のツユを取りながら立ちて座に行くを相圖に。仕手柱に居たりし千歳は立ちて脇座の方にゆきて。面箱役者の上に着座し。一の松に居たりし三番叟は仕手柱先に出てゝ下に居り。囃子方は笛小鼓(三人)大鼓太鼓と順々に舞臺に入り。仕手柱にて正面に向ひ拜禮をなしては常の處に着席し。それよりシテの後見は太夫のうしろに。地謠は囃子方のうしろに。狂言の後見は後見座に着座する前。仕手柱にて

拜禮をなすは囃子方に同じ。此拜禮は神または君の御前に對して敬禮する式の名殘なるべし。

右出で揃ひたる人々の裝束をしるさば。太夫は翁烏帽子に翁狩衣を着して指貫をはき。千歳三番叟面箱は侍烏帽子直垂にて。千歳と面箱とは小刀を帶び。囃子方以下の人々は總べて侍烏帽子に素袍なり。

脇鼓

笛の吹出し

笛の吹出しありて小鼓打ち出す。翁に限りて小鼓三人なり。中央なるを頭取と稱ふ。其左右なるは副役にして之を脇鼓といふ。脇とは本尊の脇立などいふ脇の字にて。助役たる意味の文字なり。それより太夫「とう〳〵たらり〳〵ら。たらりあがりらゝりとう」と歌ひ。地「ちりやたらり〳〵ら。たらりあがりらゝりとう」と歌ひ。太夫「ところ千代までおはしませ。」地「われらも千秋さむらはう。」太夫「鶴と龜との齡にて。」地「幸心にまかせたり。」太夫「とう〳〵たらり〳〵ら。」地「ちりやたらり〳〵ら。たらりあがりらゝりとう。」こゝにて笛ひしぎあり。

鼓の打方かはりて千歳「鳴るは瀧の水。なるは瀧の水日は照るとも」と謠ひながら。直垂左右の袖のッュを取りて立ち。地の「絶えずとうたりあありうとう〳〵〳〵」の謠にて大小前より正面先に進み。千歳「たえずとうたり。常にとうたり」と歌ひて。左右のッュを放し。あとに下りて袖卷き上げ拍子踏み。是より千歳の舞となる。

舞の半にワカあり。君の千歳を經ん事も。天つ乙女の羽衣よ。鳴るは瀧の水日は照るとも」と歌ひ。地は「たえずとうたりありうとう〳〵〳〵」と謠ひて。笛段々に進み。勇ましく舞ひ納めて座に歸り又下に居る。千歳も面箱も總て座にある時は。兩手突き敬禮して居る流儀と顔を上げて常の躰にして居る流儀とあり。顔を上げて居るは舊幕時代勸進能などの時の式を用ひ。兩手突き居るは謂はゆる御前掛として。神と君との御前にてする式を用ひたるとぞ。小鼓大鼓にも時によれば御前掛の式とて。床几にかゝらぬ事もありとなん。是は序な

筑立つ

れば い
ふのみ。
皷なほ
りて太
夫総角
やとん
どや」と
歌ひ。
地「尋ば
かりや
とんど
や」と歌
ひ。太

筑立つ

夫座し
て居た
れども。」
地「參ら
うれん
げりや
とんど
や」と扇
ひろげ
て立ち。
大小前
の方に
向ひて

ゆくと。此時三番叟も立ちてこなたに向ひ。兩人向き合ひて後。太夫は正面に直すと同時に。三番叟もくつろぎて狂言柱の下に至る。是より太夫兩袖を一ぱいに廣げ。「千早振。神のひこさの昔より。久しかれとぞ祝ひ」と調子高く朗かに歌ひ。地「そよやりおやんや」とうたひ。此間に太夫左右などの形ありて。再び扇を高く搆へ。「およそ千年の鶴は。萬歳樂と歌うたり。また萬代の池の龜は。甲に三極を備へたり。洛の砂さゝ〳〵」として。朝の日の色を朗じ。瀧の水れいれいとして。夜の月あざやかに浮んだり。天下泰平國土安穩。今日の御祈禱なり」と歌ふ。この「天下泰平」以下の文句は。殊に大切なる事とし。謹慎にも謹慎を加へ。聲高らかに吟ずる習なりといへり。かくて太夫「在原や。なぞの翁ども」と歌ひ。地「あれはなぞの翁ども。そやそや何くの翁とう〳〵」と進ませて歌ひ。太夫「そよや」と歌ひ。是より位しづまりて神樂となる。

天地人の拍子

此より先。千歳の舞の間に。太夫は白式の翁の面を着け。後見に紐結ばせて置きたれば。立ちあがる時よりは。顔に面を着け居るなり。始は唯の社人にて神前に出て。此に始めて翁の姿に擬して立ちあがり舞ふとの意なるべし。之を見ても能の神事に起れるを知るべく。翁が能の起原となれるも知らるゝなり。

神樂は翁に限りたる舞にて。笛は唯あしらふが如き唱歌を吹き。小鼓の拍子にて舞ふなり。まづ心靜に目附柱へゆき三つ拍子を蹈む。之を天の拍子といふ。それより脇柱の方へゆきて又三つ蹈む。之を地の拍子といふ。こゝにて位すゝみて大小前より正面に出で。左の袖をかづき扇を顔に當てゝ右へ一つ廻り。更に袖を卷きわげて直におろし。又三つの拍子あり。之を人の拍子といふ。此天地人の三拍子ことに此道に於て秘事とするとかや。

人の拍子すむと太夫「千秋萬歳のよろこびの舞なれば。一舞まはう萬

翁がへり

お能始めませい

歳樂」と歌ひ。地「まんざいらく。」太夫「まんざいらく。」地「まんざいらく。」
とうたひて翁禮拜し舞ひ納む。一たび此舞を見たる人は。心からがうしく身おのづから嚴肅になるの思あるべし。
かくて太夫は元の座に歸り。面を取りて箱の上に置き。正面先に出でゝ始の如く拜禮をなし。立ちて橋掛より幕に入る。千歳も(上懸の時は)同じく跡に附きて入るなり。之を翁がへりと名づく。
幕府大禮の御能にては。將軍の御着座ありていざといふ時。若年寄一人與斗目長上下にて。正面の階子を昇り一の松まで來り。片膝つきて「御能始めませい」といふ。太夫は若年寄の舞臺にあがり來るを見て半幕あげさせ。床几をはづして平伏するの禮あり。かくて若年寄かへると幕をおろし。更に幕を上げさせて太夫出で翁はじまる事前にいへるが如し。
幕あがると。御小性二人長上下にて將軍御座兩方の御簾を捲き

將軍の翁御覽

翁に大名の御座あがらず

あぐれば。將軍は麻上下にて既に着座あり。此まゝにて翁がへりまでは必ず御覽あるを吉例とし。それより次々の能は。御簾を上げてもおろしても。隨意に御覽ある定なりしとぞ。幕府の式樂たる能に重きを置かるゝはいふまでもなく。殊に天下泰平の祈禱たるべき翁を以て。むしろ宗教上の儀式の如く取扱はれしさまも思ふべし。
是につきて一つの話あり。萬延元年十一月十三日の事なりしとか。尾州侯の上屋敷にて能のありたる時。觀世清孝の翁。梅若實の千歳なりしが。例の如く幕あがりたるに。正面なる將軍の御簾あがらず。さりとて止むべきにあらねば。翁を勤め終りて後。清孝より。今日の翁に御簾のあがらざりしは。從來の御吉例に背き候やうに存候。何故に御座候哉と。伺を出だしたるに。俄に氣が附きたるものか。聊か御不例にて御簾の内より御覽相

若年寄の不躾

成りしと。辯解せられて事すみたりといふ。幕府の法式は傳はりて大名に及びたるなり。さるにても御三家に對して一本きめこみたる觀世太夫の權幕。いかに盛なりしものならずや。

又今一つの話は。いつの年代かは知らねど。幕府にて觀世太夫(一說には金春太夫)の翁ありしに。若年寄は能役者に對し片膝突くを不見識とや思はれけん。一の松に立ちながら「お能はじめませいをいひたるに。幕をおろしたるまゝ太夫は出てず。餘りに時間が立てば。如何なる事ぞと樂屋へ御尋ありしに。太夫答へて曰く。從來翁の御吉例には。橋掛一の松にて片膝御突きありて仰せありたるに。今日は未だ其御式なければ。見合はせ申したる若年寄がすぐ〳〵と舞臺にあがり來りて。此度は片膝つきて言ひ直したるにて。子細なく翁が濟みたりと云ふ事。此道の人の口碑に傳はれり。かの幕府の御役人といへば。鳴る神よりも恐れられたる時代にして。此道ばかりは是れよりも權あるものとし待遇せられし事。一種の趣味ある物語ぞかし。

翁の替の式

十二月往來

父財延命冠者

法會之舞

前にいひたる如く。昔は數日つゞきたる能にも。日々翁のありたるが故に。初日之式。二日目之式。三日目之式。四日目之式などゝて。文句をも形をも裝束をも。多少かへて用ひ。五日目よりは又初日之式にかへりてする事なりしが。右四日間の式のみにても珍しからねば。時によりては。十二月往來。または父財延命冠者などいふ物をする事もあり。また法會之舞とて佛事供養などの時にする翁もあり。

三番叟立

翁がへり濟みて小皷一先づ皷を肩よりおろし。更に三人して打ち始め。是まで交らざりし大皷も打ち出して。三番叟「あゝ」と掛聲しながら走り出て。おゝさい〳〵喜ありや。喜ありや。この所より外へはや

揉の段

揉出し

烏飛

鈴之段

種まき

面がへり

ユリアハセ

らじとぞおんもふ」と歌ひて。拍子踏み舞となる。之を揉之段といふ。此時すでに侍烏帽子を脱ぎて。剣先の三番叟烏帽子を被りて居るなり。其舞ひ出づる掛りの鼓拍子を揉出と稱へ。舞の間に横飛する形を烏飛と名づく。

揉之段すみて後見座にくつろぎ。黒式の尉面を着けて仕手柱先に出て。面箱(下懸ならば千歳)と問答して後鈴を受取り。面箱は引きて橋掛より幕に入り。三番叟は是より鈴之段を舞ふ。鈴をば右に持ち扇は左に持ちてなり。舞の内に。扇をうしろにし躰を屈めて。鈴もて種など土に蒔きあるくやうにする所を種まきといひ。扇を片方に除けては面を切りて見まはす所を面がへりといひ。鈴と扇と左手に廣げて正面先にて拍子ふむ所をユリアハセといふ。むつかしき處なりとぞ。終りに跡へしさり鈴いたゞきて舞ひ留むる處。立ちてするもあり下に居るもあり。下に居るは御前がゝりの式とぞ聞く。

三番叟の外の舞

風流

三番叟にも種々の替ありて。初日より四日目までの式を始め。外に附舞とて常よりも長く舞の手を入るゝあり。橋掛舞とて橋掛まてゆきナガシの拍子につれ舞ふ事もあり。和合とて二人にて舞ふ事もあり。

これにて三番叟の舞もすみ。面を取りて楽屋に入れば。脇鼓二人だけ座を立ちて楽屋に入り。地謡は先に翁の太夫のすわりたる後の方に常の如く居ならび。他の囃子方は出てたるまゝにて。次の脇能となるを法とす。

此三番叟のすみたる跡。または翁がへりすみて三番叟の始まる前などに。風流といふものゝ出づる事あり。狂言にて能の真似をするといふやうなるものにて。中々雅味あるものなるに。近來すべて之を廢したるは。役者人數の少なきと。裝束の揃はぬなどがその原因なるべけれど。いかにも残念なる事なり。その

名目をあぐれば。

鶴龜風流　松龜風流　松竹風流
松島風流　仙鶴風流　住吉風流
春神風流　春日風流　福神風流
布引風流　併鶴風流　相生風流
壽福風流　根延風流　青龍風流
毘沙門風流　仙人風流　七夕風流
苔頡風流　蟻　風流　三角風流
如意寶珠風流　枇杷橘風流　三面風流
布留風流　鳳凰風流

など其數いと多し。明治二十年の五月。梅若家にて先祖の千年祭を執行せしとて。その祝の能を催したる時。鷺權之丞のシテにて松竹風流のありたるは。おのれも見て記憶せり。其後は何

くにも此事ありしを聞かず。

高砂

前ジテ　老翁
小牛尉又は小尉　尉髭　厚板　大口　水衣
腰帯　扇　サラヘ
後ジテ　住吉明神
邯鄲男又は梨男　透冠　黒垂　色鉢巻　大口　狩衣
腰帯　扇
ツレ　老女
結　結髪　葛帯　箔　水衣　杉箒

能のしなり　一の卷

ワキ　阿蘇宮神官
大臣烏帽子　厚板　大口　狩衣　腰帯　扇
ワキツレ　随行者
ワキに同じ。
アヒ　浦人
折烏帽子　素袍上（下又は長袴上下）小サ刀　扇

高砂住吉の松の精夫婦と現じ來りて阿蘇宮の神官と松のいはれの問答をなし。後住吉の明神あらはれて夜神樂を舞ひ。君が代を祝し給ふ心を作れる能なり。太鼓あり。季節は春。土地は前は播州高砂の浦。後は攝州住吉の社。

正式の脇能にて翁ある時は翁の次。無き時は初番に用ふ。但し祝言として次第道行待謠にて後ツテのみ出づる事もあり。その時はトメに用ふるなり。松の作物を出だすもあり。また出ださぬ事もあり。觀世流にては昔は出だしたる趣にて。古圖などには書がきてあれど今は用ひず。

三大臣
五大臣
脇

次弟にてワキおよびワキツレ出づ。ツレは二人の事も四人の事もあり。二人の時はワキと共に三大臣と呼び。四人の時は五大臣と稱ふ。大臣にてはあらざれど。他の能の大臣脇と同じ出立なれば假にいへるなり。又ツレの狩衣は赤地なれば。俗にツレの事を赤大臣ともいへり。

翁附の時は禮脇とて。ワキの幕を離れたる時。欄干ぎはに出て。舞臺の方を見込む事あり。また舞臺に入り下に居て。左右の狩衣のツユを取り達拜の式あり。此間ツレは橋掛に下に居て。ワキの立つと共に舞臺に入り。一同兩側に立ち並び向ひ合ひて。「今をはじめの旅衣。〳〵。日も行末ぞ久しき」を歌ふ。通例の次第はワキ一度うたひ。地謠これを低音に繰返し歌ひてワキの名乗となる順序なるを。

三返がへし

地取

ワキの名乗

ワキの着座

禮脇の時は三返がへしとて。ワキ一度。地一度。ワキ又一度と。都合三返これを歌ふなり。地謠の繰返すことを次第の地取と名づく。これも常は拍子に掛らず歌ふ事なるに。三返がへしの時のみは拍子に掛かりて歌ふ。

「抑も是は阿蘇の宮の神主友成とは我事なり」云々と名乘る詞の間は。ワキ正面を向き。ツレは下に居る。道行になりて又一同に向ひ合ひ。謠すみて脇柱の下へワキは着座し。ツレは段々と其次々にすわり並ぶ。此時ワキの着座する場所なるが故に。舞臺正面の左の柱を脇柱または大臣柱と稱ふるなり。是よりワキはシテと問答する外別に用なきが如くなれども。能一番の間。舞臺の裝飾となりて一方に座し居る事なれば。少しにても其行儀の崩れたらんには。その能の瑕瑾になりて。見る人を厭はしむる原因ともなるべければ。その修業鍛錬一とほりの事にはあらじ。今の實生金五郎も兄の新蒲も。舞臺に

シテの出

出て〻瞬一つせざるを以ても。ワキの家の心得は。またおのづから別なるを知りぬべし。

眞の一聲にてツレ、シテとサラヘ(又は箒)をかたげて出て來り。橋掛に向き合ひ詰足などの法式ありて。同音に「高砂の。松の春風ふきくれて。尾上の鐘も響くなり」を歌ひ。二人正面むきて。ツレは二の句「波は霞の磯がくれ」を歌ひ。又向き合ひて同音に「音こそ汐の滿干なれ」を歌ひ。それよりシテはサラヘ(又は箒)をおろし引きずりて舞臺に入り。ツレは眞ン中に。シテは仕手柱先に立ちて。「誰をかも知る人にせん高砂の」以下の文句を歌ひ。「心を友と菅莚の思をのぶるばかりなり」にて打切となり。「音信は松に言とふ浦風の。落葉衣の袖そへて。木蔭の座をかゝうよ。〈〉」の下歌より。「ところは高砂の」の上歌に移り。「なほいつまてか生の松」あたりより。シテとツレと入りかはりて。シテは大小前より眞ン中にゆき。ツレは右の方の正面先に出て〻立ち

ワキの詞

居る。

足とまり謠の切るゝを見て。ワキ「里人を相待つ處に。老人夫婦來れり。いかに是なる老人に尋ぬべき事の候」と言ひ掛く。シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ」と答ふ。是より高砂の松とは何れの木ぞとの問答。相生の松とはいかなる謂ぞとの問答。老人夫婦の住吉高砂と國を隔てゝ住むとは何故ぞとの問答などありて。高砂とは上代の萬葉集を表し。住吉とは當代の古今集を表すなどの講釋となり。「四海波」の初同に至りてツレは地の前にゆきて座し。シテは出てゝ開き。

初同

松の作物ある時は「松こそめでたけ」と松を見る形などもあり。「げにや仰ぎても」と廻りて。ワキへ「君のめぐみぞ有難き。〳〵」と開き留むると。ワキ「猶々高砂の松のめでたきいはれ委しく御物語り候へ」の詞あり。それより大小の打掛ありてシテは真ン中にゆきてすわり。「それ草木心なしとは申せども」のクリの謠となる。すわりたる時サラヘ（又は箒）

クリ

を下に置き。腰にさしたる扇を抜き出だして手に持つなり。すわり方は流儀によりて違あり。觀世實生は左の膝を立て。その他は右の膝を立つ。

クセの仕舞

クセの「異國にも本朝にも。萬民これを賞翫す」までは居グセにて。シテに何の所作もなし。「高砂の。尾上の鐘の音すなり」のアゲを歌ひて。扇を腰にさしサラヘ（又は箒）を持ちて立ちあがり。正面へ出てゝ。「立ちよる蔭の朝夕に。かけども落葉のつきせぬは」と。二三度松の落葉を掃きよする形をなす。此處幕府大禮の能には。右より左へ二度かき。又左より右へ一度かきよせ。「久」の字を地上に書くやうにして祝意を表するを。此道の秘事とすと言ひ傳へたり。こゝの文句に「かけども」とありて「はけども」と無ければ。箒よりもサラヘ（俗にいふ熊手）を持つ方。本義に叶ふべしとの說あり。

ロンギ

また下に居て謠切れ打切ありてロンギとなり。「今は何をか包むべき。

是は高砂住の江の。相生の松の精。夫婦と現じ來りたり」と。シテツレ同音にワキに向きて歌ひ。地になれば正面に直し。シテツレの謠なればワキに向く。何れの能も同じ事なり。

この謠の内「あれにて待ち申さん」と。扇を上げうしろの方を指して住吉の方角を敎へ。立ちて「海士の小舟に打ち乘りて」と。乘込拍子ふみて舟に乘る形をなし。「追風にまかせつゝ。沖の方に出でにけりや。沖のかたに出でにけり」と。漕ぎ出だす心にてさら〳〵と樂屋に入り。ツレも其跡に附きて入る。之を名づけて中入といふ。一番の能の半にて入る故なり。

間は前ジテの舞臺にある内に。幕の傍より出てゝ狂言柱の下に着座して居るを。ワキの方より呼び出だし。なほ委しく松のいはれを聞く一段あり。その大畧は左の如し。

ワキ「如何に誰かある。ワキヅレ「御前に候。ワキ「當浦の者を召して來り候へ。ワキヅレ「畏つて候。當浦の人わたり候か。アヒ「當浦の者と御尋は。何の御用にて候ぞ。ワキヅレ「少し尋ねたき事の候間。こなたへ來りて給はり候へ。アヒ「畏つて候。當浦の者御前に候。ワキ「是は九州肥後の國。阿蘇の宮の神主友成にて候。當浦はじめて一見仕候。此所において。高砂の松目出度きと申す子細御存にて候はゞ。語つて聞かされ候へ。アヒ「是は思ひもよらぬ事を御尋なされ候ものかな。我等も當浦に住居仕り候へども。左樣の事ねんごろには存ぜず候。さりながら御尋にて候間。およそ承り及びたる通。御物語り申さうずるにて候。ワキ「近頃にて候。やがて語られ候へ。アヒカ「まづ當浦にて。高砂の松と申すは。是なる松を申し習はし候。さる程に相生と申す子細は。古今集の序にも。高砂住の江の松も。相生のやうに覺えと記しおかれたると申す。そ

れならず上代に萬葉集を撰じ給ひしを。高砂の松と號し。延喜の御代に。古今集を撰じられしを。住吉の松とたとへ。昔も今も和歌の道さかゆる事は。相同じごとくなるべきと。しるしおかれたると申す。又當社と住吉とは。御夫婦の御神にて御座候よし承り及て候。さあるによつて。當社明神住吉へ御影向の御時は。御神木の松にて神語らひをなさるゝと申す。又住吉の明神。此所へ御影向の御時も。是なる松にて神語らひをなされ。昔より今に至るまて。幾久しく相參り給ふにより。相生の松と申し習はし候。總じて當社と住吉とは。一躰分身の御神にて。男女夫婦の間の。末久しく目出度き事も。偏に當社の御神德なると申し候。されば和歌の言葉にも。沙長じて巖となり。塵つもつて山となる。濱の眞砂は盡くるとも。よむ言の葉は盡きまじいなどゝ。かくの如く承りては候へども。眞實の相生と申す事は存ぜず候。猶も松のめてたきと申す御事は。一千年の色雪の内に深しなどゝ申す傳も御座候。その子細が。諸木は冬の季にも成り候へば。雪霜に侵され。色もかはり葉も落ち候へども。松はしばしとて四季の色もかはらず。雪の内にも青々として。榮え久しき常盤なる木にて。百を十返り。千年になり花咲き申す木なれば。松に上こして目出度き物あるまじいとて。兩神もろとも植ゑ給ふにより。相植の松とも申候。わが此所をば。七千萬歳までも。守り給はうずるとの御事と。承り及びて候。總じて最前より申す如く。くはしき子細は存ぜず候。まづ我等の承り及び候は。此くの如くに御座候。さて唯今の御尋。いかさま不審に存じ候。

ワキ「尋ね申す所に。ねんごろに御物語祝着申し候。尋ね申す能のしなり　一の卷

事餘の儀にあらず。おこと以前に夫婦來られ。只今御身の物語と等しく。高砂の松のいはれねんごろに語り。汀なる小舟に取り乘り。沖をさして出て給ふと見て。姿を見失うて候程に。餘りに不審に存じ。さて方々に尋ね申す事にて候よ。ア

ヒ「是は奇特なる事を承り候ものかな。さては我等の存ずるは。疑ふ處もなき。當社と住吉の明神にて御座あらうずると存ずる。御夫婦もろとも松の木蔭を清め給ひ候折節。御言葉をかはし給ひたると推量仕り候。殊に小舟に取り乘り沖の方へ御出あり住吉にて御待あらうずると仰せられ候はゞ。少しも早く住吉へ御參詣あれかしと存じ候。幸ひ某の新造を求めて候が。未だ乘初をも仕らず候。我等の舟に召され候へ。すなはち某相取仕り。住吉へ御供申さうずるにて候。

といひて出船をすゝめ。ワキはツレと共に立ちて待謠をうたふ

事となるなり。是等の如く座したるまゝにて物語する間を。語間と名づく。畢竟シテの裝束着け替ふる間を塞がんとての所爲なれど。通俗に面白をかしく述べて謠の意味を補ひ。船を得て出帆の運に至るまでの便宜を與ふるやうに作れるは。アヒの作者の働きなり。

アヒすみて引くと。ワキとワキツレは次第の時の如く立ち並びて。

「高砂や此浦船に帆をあげて」の待謠を歌ふ。待謠とは後ジテの出の前にあるワキの謠をいふなり。

待謠すみて出端となる。是より始めて太鼓加はり。翁附の時は七五三の頭などいふ事ありて。後ジテ透冠狩衣の姿にて扇もちて出て。此度は全く住吉明神の姿を現はし給ふ事なれば。前の老翁の時の如く位靜ならず。早き位にて「我見ても久しくなりぬ住吉の」を謠ふ。勇ましく神々しき事かぎりなし。

「久しき世々の神かぐら。夜の鼓の拍子を揃へて」と両手を廣げ。イウケン扇を二度するは。笏拍子打つ形なるべし。かくて「すゝしめ給へ宮つことたち」と囃子方の方へ向くは。假に囃子方を夜の鼓の役者なる宮つ子たちに擬したるにて。石橋の「打てや。囃せて牡丹ぼう」といふ處の形に同じ。流儀によりては右の方を指して囃子方へ向かぬもあり。おもふに向かぬ方が却りて上品にて見よくはあらざるか。

地「西の海。あをきが原の波間より。」シテ「現はれ出でし住吉の」と。拍子を踏みて目出度く神の出現ましゝたる心あり。シテ「春なれや。殘んの雪の朝香潟と。指し廻して殘雪の景色を見わたし。シテ「松根に倚つて腰を摩れば」と開き。地「千年の緑手に滿てり」と太鼓高キザミありてシテ拍子を踏み。シテ「梅花を折つて頭にさせば」と扇を上げて頭を指し。地「二月の雪衣に落つ」と。右の手添へて狩衣の左の袖を廣げ。面つかひて上の方を見わたして。雪の袖にかゝるを受け留むる形を

なす。風雅の極なり。先年梅若實のを見たりしが。誠に春の淡雪は空より降り來りて。袖を斑になしたるかと思はれたり。上手のわざは又違うたるものかなと。今も眼前にある心地す。

是よりシテは左右のツユ取りて達拜し。五段の神舞となる。もとより五段本式なるを近年は畧して三段にする時もあれど。好ましからぬ事なり。この神舞は興に乘じてみづから歡びの神樂を舞ひ給ふところなれば。いさましきが上にも勇ましきこそ本意ならめ。

舞すみて太鼓は撥を收め。打切ありて「有難の影向や」のロンギとなる。

「げに樣々の舞姫の。聲もすむなり住の江の。松影もうつるなる。青海波とは是やらん」とシテ謡ひつゝ。さして開き拍子ふむ形などあり て。地「神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。」シテ「それぞ還城樂の舞」と大きく廻り。地「さて萬歳の。」シテ「小忌衣」と袖を見。地「さすがひなには惡魔を拂ひ」と。指し廻して開くもあり。イウケンして開く

もあり。「をさむる手には壽福を抱き」と兩手にて扇持つは。抱くといふ文句に合はせての形なり。それより正面に出てゝ狩衣の袖を卷き上げ。仕手柱にて開き更に左の袖かへし。留拍子ふみて留むるなり。留むる時。脇正面の方に角かけて立つは觀世寶生にて。幕の方を向きて立つは其他の下懸なり。かくて大小の留頭ありてシテは扇を疊み樂屋に入る。その樂屋に入る時幕のおるゝまでは其位ありて入る事なれば。眼を凝らして見てあるべきを。近來はシテいまだ留拍子も踏まざるに。四方八方よりパタ〳〵と拍手するは。シテの不滿足いかばかりならんと推し量らる。能の見物人も行儀知らぬ世とはなりにけり。

高砂に附きたる物にはあらねど。翁附脇能の始にワキ出てゝ。まづ其時新作の祝言詞を發聲する事あり。名づけて開口といふ。徳川時代の御大禮には必ず行はれたりしが。其他にては加州侯

と本願寺との外には。之を許可せざりし程の重きものとなし。脇師もし之を歌ひ誤る時は。遠島の刑に處せらるゝ法なりしといふ。その文句は。

それかしこき代々のすめらぎの。ひろき惠に四つの海。八島の外も和らぎて。靡き樂しむ時つ風。吹き傳へたる秋津洲の。神の御末の知ろしめす。國の光はいやましに。月日と共にかゞやきて。八百萬代も曇なく。めでたかりける御代とかや。

(嘉永元年五月廿九日禁中御能)

の如きものにて。ワキの獨吟するのみ。大小のアシラヒも何もあらず。結句は必ず「何とかや」と留むる式なるが。それも定則ありて。禁中にては「御代とかや。」幕府にては「時とかや。」加州侯にては「國とかや。」本願寺にては「法とかや」と作りたり。幕府のは林家にて作る吉例なりき。

高砂

前にも述べたる明治二十年梅若家先祖千年祭の能の時には。春藤六右衛門アキにて開口を歌へり。文句は近衛老公の作にて。それ松竹に並びては。梅こそまことの千代のもの。其いにしへに梅津てふ。處に根ざす梢とて。今も榮ゆる花の香は。めてたしといふ外ぞなき。

なりしが。是は前後に稀なる例なれば。さすがに「何とかや」をはよけられしならん。

是は昔の事なるが。萬治元年の秋。京都四條河原にて喜多十太夫の勸進能を見たりし人の書きたる評。舞正語磨といふ書に載せたるがあれば。高砂の處を抜き出だし示さん。此人は傲慢の氣みち〳〵て惡口罵詈に過ぎたる處もほし。その心して見なんにはあるひは。參考ともなりぬべきか。

高砂にまづ持ちたる箒。四五寸も長く侍り。これは器物なれ

ば。長きも短きも苦しがらじと思ふべけれども。能には固く寸法定まる。さて一聲のしづめ頭。踏み留むる足。かつて無し。能の習にて。踏み留むる一聲。踏み留めぬ一聲とて。皷にも打樣かはれり。太夫の足ちがひぬれば。皷と不相應に見え侍り。此所には有の目附とて。高砂一番の肝心あり。目くら立に立ちて。高砂の松の春風と謠ひたり。高砂の松も見もせずして。高砂の松とはうたひがたし。此時の太夫の目付を狂言師よく見おきて後のアヒを語る時。是なる松と相違なく打目の處を教ふるなり。舞臺には折目とて。一寸違ひて千里を隔つる習の法度ある事なり。是を目付の目付と號す。然るに長能が言葉にもと。面を兩の手にて直せり。これはそも何事ぞや。「では「くり「さし「くせ」まひ「あげは「さり。これを六折と號して。容貌を正して習ある所なり。面裝束などを直すには。

處定まりたる口傳あり。海士の小舟と乘りたる躰げう〳〵しくて惡しかりき。拍子を揃へといふ時に。遠拜を二つしたり。古より名人は神かぐらとこそ遠拜すれ。それ遠拜と書く文字は拜み遠するといふ字なれば。これ再拜の心なり。神には再拜をし佛には三拜をなす。拍子を揃へといふ時に遠拜すべき子細なし。西の海あをきが原の波間よりといふ處は。底筒中筒表筒の御神躰の風躰ある處なり。然れどもあの太夫は更にかやうの事を知らず。殘の雪といふ處は紋の目付の仕舞ありと。古人は言ひ置き侍るに。只わくる仕舞にてまぎらかし乘り舞ひたり。げにさま〳〵の舞姫のと。引きすゑて打切らせたるは。是れ脇能の祝言ならじ。舞姫を引きすゑて打切りたるは忌々し。萬歳樂には命を延とうたふ所は。其日の祝言の肝心にて。國を祝ひ郷を祝ひ家を祝ひ身を祝ふ。祝言の頂上の結びなるに。その仕舞さへなかりけり。颯の聲ぞ樂しむと。卷頭卷軸の又祝言なれば。皷にもきり〳〵の習といひ。

能のしなり　一の卷

太夫にも切入の習とて。左へまはりて右へ入る陰陽の足數あり。然るところをまげどめに留めて。右へまはりて右へ入りたり。細工能の見取藏と見ゆ。

此内「夜の皷の拍子をそろへて」と達拜二つしたりといへるは。イウケン扇を見あやまりたるか。又はシテの形が達拜のやうになりたるにてもあるべし。兎に角に達拜すべき筈はなし。イウケンは前にもいへる如く笏拍子の所作なれば。「神かぐら」にても拍子をそろへにても。文句には合ひたるを。神を拜む形なりと評者の心得たるこそをかしけれ。罵詈せんとならば今少し調べてにすればよかりしを。

八島

前ヲテ　漁翁
　初倉財又は三光財　財髪　厚板又は熨斗目　水衣
　腰帯　財扇　釣竿
後ジテ　判官義經
　平太　梨子打烏帽子　黒垂　白鉢巻　厚板　法被
　半切　腰帯　太刀　修羅扇
ツレ　漁夫
　直面　若流シテに同じ　釣竿
ワキ　旅僧
　角帽子　水衣　無地熨斗目　腰帯
アヒ　浦人
能のしなり　一の巻

長物上下　小サ刀　扇

旅僧ありて讃州八島の古跡を吊ひ。義經の幽靈にあひて昔語を聞く事を作れる能なり。修羅物の一つにて二番目に用ふ。八島田村能の三番は勝軍を作りたる能なれば殊に祝言のものとし。之を勝修羅と名づけたり。通例ワキは一人なれども。翁附などの時はツレ僧の二人出づる事もあり。太鼓なし。季節は春。

ワキ出づ

次第にてワキ出て。舞臺に入り。仕手柱先にて踏みとまり。大小の方を斜に向きて。「月も南の海原や。〳〵。八島の浦を尋ねん」と歌ふ。地謠低音にて之を繰返し歌ふ。之を次第の地取といふなり。此地取の間にワキ正面むき。「是は都方より出てたる」云々の名乗あり。此ワキを下り僧といふは。都を出て〻西國へ下る途中の僧なればなり。

道行

それより道行になりて。「春霞うきたつ波の沖つ舟。〳〵。入日の雲も數そひて。そなたの空とゆく程に。(打切)はる〳〵なりし船路へて。八島の浦に着きにけり。〳〵」の謠あり。急ぎ候程に。是は早八島の浦に着きて候。日の暮れて候へば。是なる鹽屋に立ちより。一夜を明かさばやと思ひ候。」の詞を述ぶ。之をツキゼリフといふ。其地に着きたるよしの文句なればなり。ツキゼリフすみて脇座に至り下に居る。一聲となりてツレの男釣竿をかたげ出で。次に老翁のシテ同じく釣竿をかたげ出て來る。橋掛に立ち向き合ひて。シテ「面白や月海上に浮んでは波濤夜火に似たり。」ツレ漁翁夜西岸にそうて宿す」二人「あかつき湘水を汲んで楚竹をたくも。今に知られて芦火の影。ほのみえそむる物すごさよ。」シテ「月のてしほの沖つ波。」ツレ「霞の小舟こがれ來て。」シテ「海士の呼聲里ちかし」と掛合に謠ひ。シテは竿をおろし引きずりて。ツレを先に立てつゝ舞臺に入り。ツレは其ゾ中に。シテは仕手柱先に立ちて。「一葉萬里の船の道。唯一帆の風にまかす」以下のサシを歌ふ。

前ジテ出つ

下歌上歌

「海岸そことも知らぬひの。筑紫の海にやつゞくらん」にて打切ありて下歌となり。「こゝは八島の浦づたひ。海士の家居も數々にて又打切ありて上歌となる。「釣のいとまも波の上。（打切）〳〵。能みわたりて沖ゆくや。海士の小舟のほの〴〵と。見えて殘る夕ぐれ。（打切）浦風までものどかなる。春や心をさそふらん。〳〵」と二人同吟し。諸すぎてシテ「まづ〳〵鹽屋に歸り休まうずるにて候」の詞あり。釣竿を捨て眞ン中に行きて下に居。ツレも竿を後見に渡してシテの右の方に下に居る。

ワキとの問答

ワキ立ちて「鹽屋のあるじの歸りて候。立ち越え宿をかばやと思ひ候」と獨言し。「如何に是なる鹽屋の內へ案內申候」と案內を乞ふ。ツレ立ちて「誰にて渡り候ぞ」と問ふ。ワキ「諸國一見の僧にて候。一夜の宿を御かし候へ。」ツレ「暫く御待ち候へ。あるじに其由申し候べし」といひてワキを待たせ置き。シテの側へゆきすわりて。「如何に申し候。

諸國一見の僧の。一夜のお宿と仰せ候」といひ。是より色々問答ありて。遂に旅人は都の

能のしかり一の船

ものなりとの事に同情を寄せ。「げに痛はしき御事かな。さらば御宿をかし申さん」となる。此間いつも有る問答のやうなれど。味へば情あり趣ある處なり。

初同

「八島に立てる高松の」とシテは立ちて招き入るゝ心あり。「昔のむしろは痛はしや」とて静にシテもすわりワキもすわる。是にておの〳〵室に入り席定まるを見る。窓もる朧月夜のうすあかりまで。席にさし入る心地やせまし。此時ツレも地謠前に至りて着席するなり。

カケリ

打切ありて初同となる。旅人の故郷も。都と聞けばなつかしや」とて涙を催し來りしが。「我等もゝとはとて。やがて涙に咽びけり」とて片手にしてをる。しをるとは泣く形をするをいふなり。

ワキこゝにて。源平の合戰の昔語を聞かん事を所望す。シテ「安き間の事語つて聞かせ申し候べし」とて扇持ち床几にかゝりて語り始む。この物語の間をカケリと稱ふ。「源の義經と。名のり給ひし御骨がら。あッぱれ大將やと見えし。今のやうに思ひ出てられて候」とワキへ向く。是はカケリの間すべてワキに向きて居るべきなれども。それにてはつゞめ〳〵がはッきりせざる故。正面の聽衆へ向ひて物語をなし。其詞の切目ごとにワキへ向きてするが。能の一手段にて。實際と離れ味ふべき處なり。

是よりツレと掛合の物語になり。「着たる兜の鍬をつかんで」と廣げたる扇を左に持ち前に出だし。之を鍬の心にて。「鉢つけの板より引きちぎつて」と。力を入れ前に引き寄せて。ぱたりと膝に手と共に落す形をなすもあり。又扇を廣げずに兩手を寄せ。「引きちぎつて」と左右に離す形の時もあり。「左右へくわつとぞのきにける」と。左右を見まはし。「之を御覽じて判官。御馬を汀に打ちよせ給へば」と。床几を立ちて。「能登殿の矢先にかゝつて馬より下にどうと落つれば」と。目附柱の方に佐藤嗣信の馬のりすゝめたるを見付け。扇にて胸ざしゝて

胸を射られたるを敎へ。拍子一つドンと蹈みて落馬せし有樣に擬し。「船には菊王も討たれければ」と。更に正面の方に船中を見て。「船は沖に」と遠く漕ぎゆくを見おくり。相引に引く汐の。跡は関の聲たえて」と。右の方へ廻る間に。今まで眼前にさながら見えたる戰の庭も。忽ち消えて影も形も殘る處なく。「磯の波松風ばかりの。音さびしくぞなりにける」と。脇正面の方に面使ひて。夕ぐれさびしく磯打つ波を低く見わたし。又松風の響を高く聞きて。靜にワキに向ひて打ちすわる。此時の心。書にもかゝれず。口にもいはれず。たゞ能もてこれを見せ得べしともいふべきか。

ロンギ

ロンギになりては別儀なし餘情あるべしと。古書にいへるは。味わる敎なり。一句々々と判官の面影を。夢幻の間に現はし來る處なれば。唯ワキに向き正面に直し。又むき又直すといふ内にも。そのむなかるべからず。さりとて別に仕方のあるにあらず。全く腹のみに

中入

アヒ

てさやう見するなれば。そこが太夫の巧拙のわかるゝ處ぞかし。「その時は我名や名のらん」とワキに一つ答へて立ち。仕手柱までゆきて「義經の浮世の」と再び立ちかへりワキにとくと向き。「夢ばしさまし給ふなよ」と開きて中入となる。餘韻嫋々。星影おぼろに波に浮びて。夜風さむけく海士の苫屋におつる思あり。ツレも共に入る流儀と。トメまて殘り居る流儀とあり。

シテ樂屋に入ると。アヒ出てゝワキと問答の後物語をなす。

アヒ「かやうに候ものは。八島の浦に住居する者にて候。此間は鹽屋を見舞ひ申さず候間。今日は罷出て。鹽屋を見舞ひ申さうずるにて候。やあ是なるお僧は。何とて某の鹽屋へはひつて御座候ぞ。ワキ「是はあるじに借りて候よ。アヒ「いや是は某の鹽屋にて候。總じて此所の大法にて。某の鹽屋をも人に見せず。又人の鹽屋をも。某の知らぬ大法にて候が。お

僧は妄語仰せられ候か。ワキ「いや〳〵妄語など申す僧にては御座なく候。それにつき此所の人にて候はゞ。少し尋ねたき事の候間。近う來りて給はり候へ。アヒ「畏つて候。さて御尋なされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ。ワキ「近頃存じよられざる申事にて候へども。此浦において源平合戦の事。御存じにて候はゞ語つて聞かされ候へ。アヒ「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等も此所に住居仕り候へども。さやうの事ねんごろには存ぜず候。さりながら御尋にて候間。およそ承り及びたる通。御物語申さうずるにて候。ワキ「近頃にて候。やがて語られ候へ。アヒカ「さる程に八島の合戦は。元暦元年三月十八日の合戦に。平家は海のおもて一町ばかり隔て。船を浮めて御座あり。源氏は此渚に御陣をすゑられ。源氏の白旗。平家の赤旗春風に棚引き。見事なること申すもおろかに御座候。然る處に小船に取り乘り。武者一騎陸にあがり。大音あげて名のるやうは。惡七兵衛景清なり。我と思はん人あらば。打ち合ひ給へ見參せんと名のりければ。源氏方より三保谷の四郎と名のり。さあらば一太刀まゐらうとて戰ひ給ふ。兩度ながらつはものゝことなれば。しのぎをけづり鍔を割り。さん〳〵に戰ひ給ふ所に。三保谷殿の御太刀。はばき本二三すおいて。ほつきと折れて候間。御覽ぜらるゝ如く。太刀打ち折つて候程に。替の太刀を取つて參り。重ねて勝負を決せんとて。少し手前を引き給へば。景清まづ御かへしあれと申して。三保谷殿の兜の鍬をじつと引かれた程に。三保谷どのはさは候まいとて。前へ引かるゝ。互に兵の事なれば。兜の鍬を引きちぎつて。景清はあゑのきにすべられた程に。ぼんのくぼに石ぶみが出來たると申す。又三保谷殿

は。うつぶしに一町ばかりころばれたるが。頃は三月中旬にて。鼻のさきが落花いたしたると申す。是は尤の御事にて候。さりながら互に譽め合うて。御本陣へ御歸りありたると申す。其日の御合戰の模様は。さま〳〵御座ありたるとは申せども。まづ我等の聞き及びたるは斯くの如くにて候。さて唯今の御尋いか樣ふしんに存じ候。

是よりワキは老人の物語せしさま。義經の浮世の夢はし覺ますなといひ消え失せし由を語り。アヒはそれとそ判官殿の幽靈なるべければ。御逗留あつて戀に御跡御とぶらひあれかしなど答へて。アヒは引込み。ワキは詞ありて待謠を歌ひ後ジテとなるなり。

此カタリアヒは普通の時にて。弓流(後にいふ)などの時は。那須之語(一名は那須與一)といふものをアヒに用ふ。那須與一の扇の

的を射る時の物語にて。みづから判官ともなり。又與一ともなりて問答する處など。一種のおもしろきものなり。

ワキ「聲もふけゆく浦風の。松が根枕そばだてゝ。思をのぶる苦むしろ。重ねて夢を待ちねたり。〈〉」の待謠すみ。一聲にてシテ出づ。此度は梨子打烏帽子に甲冑能にては法被半切を甲冑の時に用ふ)を着して太刀を帶び。純然たる源氏の大將檢非違使五位の尉といふ出立なり。

仕手柱先に立ちて「落花枝に歸らず」を歌ひ。例の如く乘込拍子ヒラキなどありて。ワキは「不思議やな早曉にもなるやらんと」と問ひかけ。シテは「われ義經が幽靈なるが」と名のり。それより謠さま〳〵あり。シテにも「心もすめる今宵の空」と曙夜の空を見あげ。「八島に入るや槻弓の」とスエ拍子ふみ。「海山を離れやらでと指しまはして見まはし。又角よりワキの前にゆきて袖かへし見かへる形などいろ〳〵ありて

クリになり眞ン中にゆきて床几にかゝる。

此ところに弓流といふ秘事を入るゝこと。觀世流にはあり。一子相傳と稱へて。容易にはせざる事とかや。

弓流の時は。床几も普通の葛桶を用ひずして。囃子方などの掛くるやうなる本物の床几を用ひ。地の「くつばみを並べて攻め戰ふ」と立ちて目附柱の方へゆき。又脇柱の方へゆきて扇を落す。

此扇は流したる弓の役をするものなれば。今こゝにて落すは謂はゆる陰なれば。目立つやうにすべきにあらず。されば小皷のポと一つにぱたりと落す秘傳ありとぞ。かくて床几に歸りて「其時何とかしたりけん。判官弓を取り落し」と歌ひ。敵はこれを見しよりも。船をよせ熊手にかけて。すでに危く見え給ひしに」の地より又立ちて。落したる扇の處に行き。取らんとして其身の波に流さるゝ心にて。仕手柱際まで猛々亂の如き流足をして。

爪立ちながら横ながれに流れゆき。「されども熊手を切り拂ひ」と歌ひながら。熊手を左右に切り拂ふ心にて面を使ひ。つか〳〵と進みゆきて左の手にて取り上げ。「つひに弓を取り返し。もとの渚に打ちあがれば」と床にかゝる。こゝにて「其時兼房申すやう」の地となり。「いやとよ弓を惜しむにあらず」と。左に持ちたる扇を右に持ち直し。クセになりて「皆感涙をながしけり」と。列座の侍臣を見まはす心にて。左の方へ下に面を使ふ。限なき情ありて。おぼえず人をして暗涙を呑ましむ。

以上は梅若實のを見たりし時の記憶のまゝなれど。殊に其家にて重んずる秘曲なれば。見そこなひもあるならん。

「智者は惑はず」のアゲすみて立ち。「惜しむは名のため」と拍子などありて。「また修羅道の鬨の聲」と。脇正面の方に鬨の聲を聞きつけたる心にて開き。「矢さけびの音震動せり」と乘込拍子ふみて。カケリとなる。

此カケリは。源平兩軍入りみだれて。火花を散らす戰のさまを見せたるなれば。わづかに大小二調の皷の聲も。天地にふるゝ攻皷の聲と聞きなされ。常ならば團曉として雲井に冴ゆべき笛の音も。海山とゞろかす叫喚大叫喚とも思はれて。且は凄く且は勇ましし。

「今日の修羅の敵は誰ぞ。何能登の守教經とや」と。昔の合戰の敵を見つけて再び其世のさまを目前に學び。「海山一同に震動して」とさして仕手柱の方へゆき。「船よりは鬨の聲と橋掛の方を海にして見わたし。「陸には波の楯」と。舞臺正面の方を陸にして扇を楯の心に左に持ち。「月に白むは「劍の光」と太刀を拔きて見。「うしほにうつるは「兜の星の影」と。水上にきらめく兜の影をながめ。「打ち合ひさしちがふる」と。太刀にて敵を切り。又敵を刺す形ありて。「浮き沈むとせし程に」と。ガッシして浮きつ沈みつする樣を見せ。「春の夜の波より明けて」と。扇を寄せ左右に引き分けて。夜の明けわたる心を知らせ。目附柱の方

より脇柱の方へ。又さして仕手柱の方へ行き。小廻して例の如く拍子ふみとむ。「敵と見えしは群れゐる鷗」といふ文句の景色。さながら目の前に見ゆるやうにて。今少し長からばと。其をはる早きを恨まし むるは。誰も同じ心なるべし。

前にもいへる梅若實の弓流の時は此キリも常の形ならずして。「船軍のかけひき」と直に橋掛にゆき。一の松にて春の夜の波より あけて」と舞臺の方を。東の山の端の心にて高く遠く見上げ。「敵 とみえしは群れゐる鷗」と。更に面を使ひて見わたしたる時は。舞臺正面の先の方に。雪の如き翼したる鳥の。ちらり〳〵と五つ六つ飛びゆくかと思はれたる程なりき。さて「ときの聲ときこえしは」と舞臺の方をあとにしてたら〳〵と下り。「浦風なりけり」より。小皷にナガシ打たせて。其ポポポポと共に幕に入り。ワキをば脇留。大小をば殘留にして留めさせたり。其時のシテの

面影。夢に現に。忘れんとしても忘れやられず。

東北

前ツテ　里女
小面又は深井　葛　葛帶　箔　唐織　扇

後ツテ　和泉式部
面前に同じ　緋大口　長袖　腰帶　扇

ワキ　旅僧
角帽子　無地熨斗目　水衣　腰帶　扇

アヒ　里人
長袴上下　小サ刀　扇

京都の東北院は和泉式部の古跡にて其植ゑおきたる梅のあるところなれば。旅僧いたりて其幽靈と問答し。讀經の功力によりて。懐舊の舞まふさまを見る事を作れる能なり。

もとは軒端梅ともいへり。葛物の一つにて三番目に用ふ。位靜に美しく上品なるものなり。太皷は無し。季節は梅なれば春にて陰暦の正月。土地は東北院。

ワキ次第にて出て。例の如く「年立ち歸る春なれや。〳〵。花の都に急がん」を歌ひ。地謠低音に地取して。「是は東國方より出てたる僧にて候」の名乘あり。「春立つや。霞の關を今朝こえて」の道行すみて。都に着きたる由の詞を述べ。東北院に來りて梅の花盛を見。「如何さま名のなき事は候まじ。此あたりの人に尋ねばやと思ひ候」とて。狂言柱の下に着座しゐたるアヒを呼び出だし。梅の謂れを尋ね。「和泉式部手植の梅なるを以て。名さへ和泉式部といふよしの返答を聞きて。

シテの呼掛

ワキは再び正面の方に向き。「さては此梅は和泉式部と申し候ぞや。しばらくながめばやと思ひ候」と歌ふ。此時も又前の「是なる梅を見候へば」の詩も。文句には梅とあれども作物は出てず。唯正面を見るのみにてそれと想像せさする趣向なり。

此ワキの詞の終に幕上げさせて。「なふ〳〵あれなる御僧。その梅を人に御尋ね候へば。何と教へまゐらせて候ぞ」と呼び掛けながらシテ出づ。それよりワキは和泉式部と教へられたるよしを答へ。シテは梅の名をば鶯宿梅とこそいへ和泉式部とはいふまじきよしを述べ。又更に和泉式部の軒端の梅なりと説き。ワキはさらばあの方丈は和泉式部の御休所なるかと問ひ。シテはげにも和泉式部のふしどなりしまゝに作りもかへざるよしを答へ。ワキ「ふしぎやさては古への。名を殘しおく形見とて。」シテ「花もあるじを慕ふかと。年々色香もいやましに。」ワキ「さもみやびたる御けしき。」シテ「猶も昔を。」ワキ「おも

初同

ふかと」の掛合ありて。初同となる。「年月をふるき軒端の梅の花。ふるき軒端の梅の花。あるじを知れば久方の。天ぎる雪のなべて世に。聞えたる名殘かや。和泉式部の花ごゝろ」の間に。正面へ出てワキへ向きて聞くなどの形ありて。ロンギとなる。「われこそ梅のあるじよ」とワキへ左の袖あしらひて開き。「夕ぐれなゐの花の陰に」と右へ廻りて正面へ開き。しづかに中入す。夕日は霞の内に隠れて。面影尚ほ花の梢にあるやうなり。

中入

アヒ

シテ幕に入ると前のアヒ立ちて名乗座に出づ。

アヒ「最前往來のお僧の。梅の名を御尋ね候間敎へ申して候。いまだあれに御座あるか。見舞ひ申さばやと存ずる。最前のお僧は是に御座候よ。ワキ「中々いまだ是に居申し候。御身は梅の名を敎へられたる人にて候か。アヒ「中々梅の名を敎へ申したる者にて候。ワキ「それにつき少し尋ね申したき事の候間。

能のしなり　一の卷

近う來りて給はり候へ。アヒ「心得申し候。さて御尋ありたきとは如何なる御用にて候ぞ。アキ「近頃存じよらざる申事にて候へども。東北院の子細。また和泉式部の御事。御存じに於ては御物語あつて給はり候へ。アヒ「是は存じもよらぬ事を仰せられ候ものかな。我等も此あたりに住居仕り候へども。さやうの事ねんごろには存ぜず候。さりながら御尋にて候を。かつて存ぜぬと申すも如何なれば。およそ承り及びたる通。御物語申さうずるにて候。カケリ「さる程に東北院と申すは。此寺都の丑寅に當つて。王城の鬼門なればとて。かくの如く東北院とは申しならはし候。本は此寺。上東門院の住ませ給ひたる處なりしを。一條の院の御宇。長元三年八月廿一日に。上東門院の名をかへ。寺となし給ひたると申す。又和泉式部と申しける御方は。生國は因幡の國越前の守大江のまさすけとやらん申したる御方の姫にて候ひしが。藤原の保昌とつれて。丹波に住み給ひて候。其折ふし。播州書寫山に。性空上人とて。尊き上人の御座ありしに。後の世の事を頼みまゐらすると申す。其歌は。くらきより。くらき道にぞ入りにける。遥に照らせ山の端の月。一首の歌をよみてまゐらせられたると申す。

かやうによみ參らせられたるよし承り及びて候。此歌は一段と殊勝なるよし申し傳へ候。其後保昌におくれ給ひてより。よろづ便もなき身とならせ給ひて。都へ上り上東門院に仕へ奉り。其時和泉式部。我住所に手づから梅を植ゑおき申され候。又軒近く植ゑおき給ひ。目かれせずながめ給ふにより。軒端の梅と申し候。是は異名にて御座候。梅は即ち怨宿梅にて御入り候。和泉式部。總じて女は罪深きものなればとて。誓願寺の御本尊へ明暮御參りあり。此處にて往生の素懷を御

東北

遂げありたると申す。誠に和泉式部。唯人ならぬ御方なれば。あの方丈の西のつまは。和泉式部の御休所なると申して。今も作りもかへず候。さて只今は何と思召し。御尋ねにて候ぞ不審に存じ候。ワキ「尋ね申し候處に。ねんごろに御物語祝着申し候。御身以前に女性一人來られ。軒端の梅の子細。また和泉式部の事我身の上のやうに語られ。其のち花の陰にて姿を見失ひて候間。餘りに不審に存じ。かた〳〵に尋ね申す事にて候よ。

待謠

是よりアヒは逗留あれかしと勸め。ワキは和泉式部の跡を吊はんと述べ。アヒ歸りて待謠となる。

後ジテ

「夜もすがら。軒端の梅の陰に居て。〳〵。花も妙なる法の道。迷はぬ月の夜と共に。此御經を讀誦する。〳〵」を歌ふ間に。念誦して亡靈を吊ふ心あり。一聲にて後ジテ出て來る。今までは里女の姿なりしが。こゝに長絹大口の出立にて。さも優美なる貴女の裝とかはりしなり。あら有難の御經やな。唯今讀誦し給ふは譬喩品よなふ」と歌ひてワキの讀經に耳を傾けたるよしを述べ。「思ひ出てたり閻浮の有樣。此寺いまだ上東門院の御時。御堂の關白此門前を通り給ひしが。御車の内にて法華經の譬喩品を高らかに讀み給ひしを。式部此門の内にて聞き。門の外。法の車の聲きけば。我も火宅を出てにけるかなと。かやうによみし事。今の折から思ひ出てられて候ぞや」と只今の讀經によりて。昔の事まで思ひてらるゝよしをいひ。ワキは。此詠歌は和泉式部の作なりとて。わが東國の田舍までも聞え高きよしをいひ。なほ問答ありて。クリとなり。サシとなり。クセとなる。常式の順序なり。

クセ

クセには立ちて舞ふ形あり。之を舞グセと稱ふ。シテはすわりたるまゝにて立たぬクセを居グセといふに對して。名づけたるなり。「見

能のしなり　一の卷

佛聞法の數々」の一句をシテ歌ひて。顏の前に横に出だしたる扇を上げて開く處を。謠にてはクセの上げと稱へ。其形をば上扇と稱ふ。むかし白拍子の舞ふ時。和歌を吟ずるには。斯くの知く扇にて顏を隱したる遺風なりと言ひ傳へたり。

序の舞

クセすみて「春の夜の」の一句より。序の舞となる。五段が正式なれど。略しては三段にもするなり。舞の心は。戀しき昔を思ひいでゝ。覺えず馴れたる袂を返して舞ふとの趣を本とし。火宅を出てゝ正覺を得たる歡喜の心をも添へたるものなるべし。

舞のトメに「春の夜の。暗はあやなし梅の花」と。歌ひながら上扇なるをワカといふ。かくて地にて「色こそ見えね香やは隱るゝ〳〵」と歌ふ間に。シテは左右して打込扇をなし。開くなどの形ありて。シテ「實にや色に染み香にめでし昔を。地「よしなや今更に。思ひいづれば我ながらなつかしく。戀しき涙を遠近人に。もらさんも耻かし。

上懸と下懸

暇申さん。」シテ「これまでぞ花は根に。地「今は是までぞ花は根に」と。上懸にては歌へど。下懸にては。地「げにや色よりも。〳〵。香こそあはれに思ほゆれ。誰が袖ふれし梅の花。」シテ「袖ふれて舞人の。かへすは花衣。春鶯囀といふ樂は。これ春の鶯。」地「鶯宿梅はいかにや」シテ「これ鶯の宿りなり。」地「好文木はさていかに。」シテ「これ文を好む木なるべし。」地「唐のみかどの御時は。國に文學さかんなれば。花のいろもます〳〵。にほひ常より滿ち〳〵。梅風四方に薰ずなり。是までなりや花は根に」と。文句かはれり。春の謠にて正月の謠初などに用ふる曲なれば。めでたき文句にせんとて替へたるにもやあらん。右の「暇申さん」の謠にてワキに向ひてすわり。會釋する心持にて立ち。「鳥は古巢に歸るぞとて」と。高く指しまはして梢なる鳥のねぐらを思はせ。「こゝこそ花の臺に」と。正面を和泉式部が寢所の心に扇にて敎へ。「夢はさめにけり」と拍子ふみて留むるなり。又は「こゝこそ花の」と

左の手にて指し。「方丈の室に」と右の方を指しまはす流もあり。

蘆刈

作物　庵

シテ　日下左衛門　直面　段熨斗目　大口　水衣　腰帯　扇　草もつ　笠
物着の後　侍烏帽子　小サ刀
ツレ　其妻　女面　葛　葛帯　唐織
ソキ及ツレ　其従者　素袍上下　小サ刀　扇
アヒ　里入

摂津の國に日下左衛門といふ人あり。貧しくて夫婦わかれ〳〵となり。妻は京にいでゝさる人の乳母をし。夫は芦賣る事をもてなりはひとせしが。ある日その妻故郷の地に尋ね來り。出あひて都に伴なひゆく事を作れり。男物とて多く四番目に用ふ。男物とは冠烏帽子など着る貴人にもあらず。又角帽子に衣の僧躰にもあらず。通例素袍を着る程の身分の姿なるといふなり。又面を着けず自分の顔にて出づるが故に直面物ともいひ。昔し又頭に作りたる髪鬘の類をも。帽子烏帽子の類をも戴かずして。自分の頭のまゝにて出づるをもて。男子結髪せし時代の詞にて自髪物ともいふ。今は散髪なれば變りなけれども。結髪せし時には。放髪とて上の元結を切り。髪を後にはね垂らして出てたり。太皷なし。季節は春にて陰暦の二三月の頃。土地は摂津くさか

の里。

薬屋の作物の出づる流も出てぬ流もあり。出づる流儀にても。或は大小前に出だし。目附柱の方に出だし。橋掛の幕際に出だすなど心々にて同じからず。

ツレとワキ出づ

次第にて女ヅレを先にし。ワキワキヅレ(二三人)出て來る。女ヅレは輿に乗り居る心なり。舞臺にて一同に向き合ひ。「ふるき都の道なれや。〳〵。難波の浦をたづねん」を歌ひ。地取すみて是は都のものなるが。主人の若君の御乳母を伴なひ。その故郷なる難波の日下の里に趣かんとするよしを名のり。淀舟に乗りて。水野の原。水無瀬川。渡邊。大江の岸。など打ち過ぎて。難波の浦に着きたるよしの道行を歌ひ。着ゼリフありて。里人を呼び出だし。其女の夫なる日下の左衛門の事を問へば。今は零落して此里には住みて居らぬよしを答ふ。よりて女ヅレは。「げにや家貧にして親知すくなく。賤しき身には故人うとしとかや申すなれば。身には限らぬ習なれども。餘りにあさましき有樣かな」とて泣きゐたりしが。暫く此處に逗留して猶も其人の行方を尋ねんといふ。ワキも之に同意し。更に此浦に面白きものあらば見たきよしを里人に語れば。此里には濱市ありて色々の物の賣買ある中に。若き男の蘆賣來りて。さま〳〵の戯言などいふが面白ければ。皆々これを買ふよしを答ふ。さらば之を見物せんとて。皆々脇座の方に居て待つ程に蘆賣る男來る。男は即ちシテなり。

シテの一聲

シテの出は一聲にて。大口に水衣を肩上げて着し。黑塗の男笠をかづき。竹に蘆の葉實は石菖または檜扇の類の葉を用ふ)を挾みたるを。右の手に持ちかたげて。一の松に立ち。「足引の山こそ霞め難波江に。向ふは波の淡路潟。げにや處から異浦々のけしきまでも。ながめに續く難波船の。出て浮みたる朝ぼらけ。心もすめる面白さよ」と歌ひ出だせる時は。其シテの顏の向ふ處に。霞みわたれる淡路島の姿よ

り。消え顯はるゝ波間の白帆まで。げにも出て浮む心地せられて。文句の如く面白き處なり。今此美景にながめ入りて。蘆刈る業さへ暫し忘れたるは。如何に心の優なる人ぞや。笠深くして顔は半ば隱れたれども。先づ其容貌まて思ひやらるゝ見物人の心。花ともいはじ。月ともいはじ。唯このシテにぞ春のながめは集まり來れる。

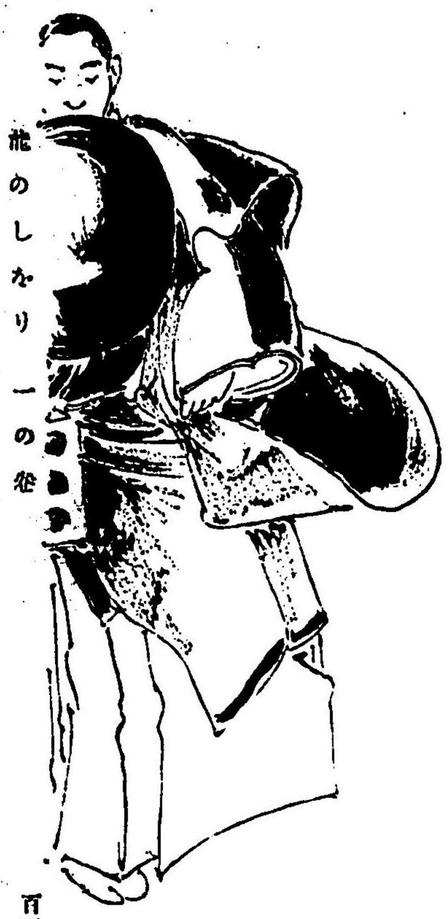
舞臺に入る

「難波なる。見つとはいはじかゝる身に」とシテ歌ひながら舞臺に入り地の「我だに知らぬ面忘れ」の跡カケリとなる。カケリは言外の擧動をあらはす處にあるものにて。修羅物ならば合戰の擧動を見せ。狂女物ならば狂ひあるく有樣を見するの類なるが。此處にては身を耻ちて。あちこちを隱れつゝ市に出づる心を餘情にあらはしたるにや。

下歌上歌

是よりシテのサシ謠。地の下歌上歌などありて後。笠を脱ぎて後見に渡し仕手柱に出づると。ワキ其男の來れるを見つけて詞を掛け。よしと蘆とは同じ草なるかなどの問答ありて。さるむつかしき道理は知らねど。唯世渡のために賣るのみなれば。草の名の蘆に其價のおあしも添へて買ひ給へなど。洒落をいふ心を地に歌はせ。「露ながら難波の蘆を刈り持ちて」と。竹に挾みたる蘆を前に出だし。扇を鎌の心にて刈り取る形をなす。此ところを何新聞なりしか。刈りたる蘆が又も生えたるにや。竹に挾みたるまゝに刈るも可笑しきものなりと。冷評せしを見たりしが。それは能の能たる點を知らぬ詞といふべし。能は其文句の心を動作にあらはすものなれば。花といへば梢をながむる所作をなし。月といへば空に見あぐる形をなすが如く。蘆を刈る物語をする處ゆゑ。我持ちたる手の物を材料に借りて。刈り取る處を學びたるのみ。今こゝにて刈る心にはあらず。かやうの事は所々にあり。是にて總べてをさとるべし。さて「夜は月をも選ぶなりや」と。月を正面先の空にある心にて見ながら立ち。「盞の内に召されよ」とワキの方へ差し出だしたれど。ワキは未だ買はんといはね

ば。暫く後見座にゆきて之を渡し置き。仕手柱先に立つと。ツキ御津の濱の事を問ひ掛け。シテは仁德天皇の皇居の地なれば。おん津と書いて御津の濱と申すよしなど說明し。「波濤海邊の大宮なれば。漁村にともす篝火までも。禁裏雲井の御火かと見えて。上雲上の月卿より。下萬民の民間までも有難かりし惠みぞかし」など語り居たりしが。ふと網船の聲を聞きつけて。「や」と心づき脇正面の方を遠く見わたして。「あれ御覽ぜよ御津の濱に。網子とゝのふる網船の。えいや〳〵と寄せ來るぞや」と開き。古歌によみたるけしきまで目の前に見ゆるとて。ワキの袖を取り誘なひ出だして其けしきを敎へ。諸共に船の漕がれくる樣。沖の嶋磯千鳥の友よぶ樣などに見とるゝ心あり。其眺望の內に田簑の島といふが有るによりて。笠もなかるべからずと。脫ぎ捨てたる笠を思ひ出だし。笠を後見より受け取り持ち來りて。與に乘じたる餘り笠づくしの秀句を歌ひつゝ舞ふ一段あり。



能のしなり　一の卷

名づけて笠の段といふ。よく仕舞などにてよく人の舞ふ處なり。「鵲も有明の」と笠と左の手と引き分けて。有明の月を見る形あり。「難波女の」と。兩手に笠を持ちて頭の上にかづく心に差し上げ。拍子ふむ處あり。「あなたへざらりこなたへざらり」と。左へ右へと拍子ふみて行く處あり。「風のあげたる古簾」と。扇かざして笠を風に吹きあげられたる心を學ぶ處もありて。興味湧くが如く。「つれ〳〵もなき心おもしろや」と。脇正面の方へ出て少し下りて。景色のよさに覺えず見とれて下に居るといふ形もあり。又は「風のあげたる」と笠をかざし見て。角の方へ風に吹き飛ばされたる心にて投げ捨つるもあり。笠を遠く投げ捨つる能は。此蘆刈と善知鳥との二番なるが。手際よくひらりと落ちてくるり〳〵と二つ三つ廻るを上手とする事なれど。中々さやうにうまく行く事は難く。如何なる名人にても。仕手柱の外の庭へ落つる事など有るものなれば。かゝる品玉めきたる所作は避けんかた。能の品位上得策なるべきかと思はる。

シテ逃げて隠る

笠の段すむと女ヅレの詞にて。其蘆一本持ちて來れといへといふ。ワキ之を傳ふれば。シテは蘆を後見座より持ち來り。笠に載せて出だすを。直に參らせよといはれて。女ヅレの前に至り之を渡す時に顏を見あげたれば我妻なりしかば。耻ぢて一言もかはさで。俄に立ちて早足に藥屋の中に逃げ込み。戸を閉ぢて出てず。(作物なき時は橋掛の幕際を藥屋の心にてそこに突きすわるなり)こゝにて女ヅレは其夫なるよしを語り。他人をやらば耻ぢて出て來ざるべしとて。自身その側にゆきて。遙々尋ね來たるに何とて忍び隱れ給ふぞと恨み。夫は若しも他人の妻となりたるには非ずやなど疑ひしが。遂に心解けて藥屋を出てゝは來りしものゝ。身のおちぶれたるを思ひ。「おもなの我姿や」と。わが左右の袖を見て。やつれはてたる姿に赤面する有樣。人情として涙こぼるゝ處ぞかし。

シテツレと語ふ

物狂　男舞キリ

こゝにてワキの「かゝるめでたき御事こそ候はね。やがて都へ御供あらうずるにて候。まづ〳〵烏帽子直垂を召され候へ」の詞ありて。物着となる。物着とは舞臺にて裝束を着くる事をいふ。今までの盧賣は。俄に侍烏帽子に掛直垂の侍姿とはなりたるなり。

クリあり。サシあり。クセあり。クセの「我等如きの手習ふ初なるべし」の打切すみてより。シテ立ちて舞ふ。嬉しさに舞ふ心なるべし。「立ち舞ふ袖のかざしかな」にて男舞あり。キリ勇ましく。「あしの若葉を越ゆる白波」と拍子ふみて波のこゆる心を學び。「月も殘り」と扇と左の手を引き分けて月を高く仰ぎ見る形あり。「今は疾べと都の空に」とシテは扇にて指すと。女ツレは先づ立ちて樂屋に入る。作なはれて急ぎ都に歸りゆく心なり。かくてシテは「かへる事こそ嬉しけれ」と拍子ふみて舞ひ納め。シテの入りたる跡よりワキとワキツレとは道入る。景あり情あり。祝言の心十分なる能なり。

船辨慶

作物　船

前ジテ　靜
小面又は若女　葛帶　笛　唐織　扇　物狂にて靜烏帽子

後ジテ　平知盛
怪士。鷹。眞角または三日月　黑頭　鉢形　色鉢卷
厚板　半切　法被又は狩衣　腰帶　太刀　長刀

判官　義經
風折又は梨子打　色鉢卷　厚板　大口　法被　腰帶
太刀　扇

ワキ　辨慶
兜巾　厚板　大口　水衣　袈裟・腰帶　小ヤ刀
イラダカ數珠　扇

能のしかり　一の卷

ワキヅレ　武士
　梨子打、白鉢巻　厚板　大口　側次　腰帶　小サ刀　扇

アヒ　船頭
　狂言上下　腰帶　扇

判官義經都を落ちて大物の浦まで至りしが。辨慶に諫められて靜をこゝより歸す事となり。船路の門出に名殘の舞を見るをもて前の段とし。出帆の後天氣かはりて風波烈しく。平の知盛の幽靈あらはれしが。辨慶に祈り伏せらるゝ事を後の段とせし能なり。太鼓あり。四番目五番目などに用ひ。春の能初などに用ふるは。惡靈退散といふめてたき意味あればなり。季節十一月なれど。文句の上に景物も何もなければ。いつにても妨なし。

土地は前は津の國大物の浦。後は播磨洋の海上。

判官とワキ出づ

次第にて判官(子方)を先に立て。ワキ(辨慶)およびワキヅレ三四人出て

ゝ。舞臺に立ちならび。「今日思ひ立つ旅衣。〳〵。歸洛をいつと定めん」を歌ひ。地謠の地取ありて。ワキ「かやうに候ものは。西塔の傍に住居する武藏坊辨慶にて候」以下の名乘を歌ふ。此間ワキヅレ一同に下に居るは。判官の事を語る處ゆゑ尊敬する意味なり。終りて「頃は文治の初つかた」と歌ひながら一同に立ち。それより頼朝義經不和にして判官都を落ち。淀より船に乘りて石清水を拜みながら行くほどに。大物の浦に着きたるよしの文句あり。船頭の家に宿りを乞ひ。船頭は奥の間へ通されて。判官以下みな〳〵脇座より順次に着座す。辨慶は判官の前に出でゝ。今日かゝる折節に。靜を御供に召し連れらるゝは似合はしからねば。御かへし有りたき由を言上す。此時すでに靜は從ひ來りて他の家に宿り居たる體なり。判官ともかくも辨慶の計らひに任す由を言ひ渡し。辨慶は直に靜の屋に至りて案内を乞ふ。幕の内を靜の屋としたるなり。

シテ出づ

静は幕を上げさせて。「武蔵殿とはあら思ひよらずや。何のための御使にて候ぞ」と言ひつゝ出て來り。都へ歸るべしとの君命なるよしを聞き。「是は思ひもよらぬ仰かな。何くまでも御供とこそ思ひしに。頼みても頼みなきは人の心なり。わら何ともなや候」といひて泣く。

判官の前に至る

さて御返事はと問はれて。みづから御供申して君の御大事になるならば留まり候はんと。恨を含みて言ひたりしが。唯とゞまらんが肝要ぞと弁慶に諭され。「よく〳〵物を案ずるに。是は武蔵殿の御計らひと思ひ候ほどに。わらは參り直に御返事を申し候べし」とて。弁慶のあとより舞臺に入りて判官の前に至る。

判官は静の來るを見るより。御身はる〳〵是まで從ひ來りたる志は神妙なれども。遠く波濤を渡りて西國まで下らんは然るべからねば。是より一先都に歸りて時節を待つべき由をいふ。静こゝに始めて弁慶が私の計らひならざりしを知り。さきに武蔵殿を恨みたるは面目なし

初同

とて。弁慶に向きて謝罪す。今までは若し判官にまみえなば。伴なはんとの仰あるも知られずと。心中に祈りし頼みの綱も切れ果てたり。口には弁慶に謝するなれども。心には判官を恨む事いかに切なりしぞ。弁慶これを慰めて。「たゞ人口を思し召すなり。御心かはるとな思し召しそと。涙を流し申しけり。」静は答へて。「いや兎に角に數ならぬ。身には恨も無けれども。是は船路の門出なるに」と歌ひ。初同になりて。「波風も静を留め給ふかと。〳〵。涙を流し木綿四手の。神かけてかはらじと。契りし事も定めなや。げにや別より。まさりて惜しき命かな。君に二たび逢はんとぞ思ふ行末」の文句あり。静の心中いひつくして漏らすなし。涙は傳はりて見聞く人の顔にもこぼれんとぞすなる。

判官も涙を押さへて門出祝の盃を勧めよと命ず。弁慶祝言を述べながら酌をなし。船路の別に一さし舞へといふ。静は涙ながらも立ち

物着
イロヘ

あがり。「渡口の郵船は風静まつて出づ」「波頭の謫所は日晴れて見ゆ」といふ朗詠の文句を吟じ終りて。「立ち舞ふべくもあらぬ身の。」「袖うちふるも耻かしや。」と心中の愁を述ぶ。あはれさ限なし。此處「旅の船路の門出の和歌。たゞ一さしと勸むれば。」と聞きて。静は舞の用意の烏帽子を着るもあり。又は「立ち舞ふべくも」の前に着る時もあり。此あとにイロヘあり。イロヘとは謠の間を彩色するといふ意味にて。蒔物にてクセ前のサシに掛かる處には。あれこれに有り。笛と大小とあれどもアシラヒのみにて乘らず。角へ行き左に廻りて本の立どころに歸るといふ程の形のみなり。

「傳へ聞く陶朱公は勾踐を伴なひ」のサシの文句以下は。静が舞曲に附屬せる歌なりと知るべし。されども有り來りのものにては面白からねば。新に判官の現況をあはれみ。將來に希望を懸くといふ。祝の心に作りなしたるが。能の能たるところ。いはゆる活手段なり。

中の舞

舞の跡歌

クセは舞グセにて。「かゝるためしも有明の。月の都をふりすてゝ」と上扇して開き。例の拍子ありて。「西海の波濤に趣き。おん身の科の無きよしを」と判官に向ひて開き。舞の内ながらも君おもふ心を忘れず。クセすみて「たゞ頼め」の一句にて中の舞となる。時によりては序の舞の事もあり。此舞は熊野などゝ違ひ。名殘を惜しむ場合の一曲ゆゑ。少しにても舞を長く舞ひて。判官の別を引き延ばさん心にて。拍子を踏むにも後るゝやうに踏むが秘事なるよし言ひ傳へたり。觀世流にては。舞の半に仕手柱際にて泣く形あり。是は前後替の習の時にする事なりといふ。

舞のあがりはワカにて。「たゞ頼め。しめぢが原のさしも草。」としテ歌ひ。「われ世の中にあらん限は」と地うたひ。「かく尊詠の僞なくは」とシテ又うたひて判官に向く。限なき涙あり。「船子ども。はや纜をとく〳〵と」と橋掛の方に向きて船を見る心あり。この「船子ども」と橋掛

の方を見やる處を。靜立ちて扇にて橋掛の方に向ひ。二つ打ち招く形をするもあれど。是は誤なるべし。そも〳〵此處は。辨慶の命によりて船頭の船よそひするを靜の見やるのみにて。靜が早ともづなを解くべしと命じたるならねば。打ち招きて。船頭を呼ぶべき理りなければなり。

かくて「すゝめ申せば判官も。旅の宿りを出て給へば」と。判官は床几を離れて二三足前の方に歩みいづれば。「靜は泣く〳〵。えぼし直垂ぬぎすてゝ」と。烏帽子の紐を片手にて解きてそこに脱ぎ捨て。「涙に咽ぶ御わかれ。見る目もあはれなりけり」と。泣きながら立ちて靜に樂屋に入る。

シテ入る

アヒ

船頭立ちて名乘座に出て。靜の心中を察し申して涙を流したるよしなど獨言にいひ。辨慶の前にゆきて。最前仰せつけられたる足早き船の用意仕りたるよしを述ぶ。さあらばやがて出だして給はれといひ。畏りたるよしを答へて。再び狂言柱の下に歸ると。辨慶立ちて船を出だすんとするよしをいひ。ワキヅレは今日御逗留と仰せ出だされたるよしを述ぶ。辨慶こゝに於て。其理害を論じ。今此御身にて靜に名殘を惜しみ給ふなどは有るまじき事なりとて。急ぎ御船を出だすべしと嚴命を下され。「立ちさわぎつゝ船子ども」と船頭走りて樂屋に入り。船の作物を持ち來りて脇座の前に。舳先を正面にして置く。此間に「えいや〳〵」と夕汐に。つれて船をぞ出だしける」の詞ありて。磯うつ波の音まで聞くかと思はるゝばかりなり。

アヒとワキとの問答

判官は舳先に乘りて床几に掛り。辨慶は胴の間に。船頭は艫に乘り。他のワキヅレは乘りたる心にて外に下に居る。是より船頭と辨慶との問答あり左にあらましを記す。

船頭「いかに武藏殿へ申し候。君の御船出に一段の天氣にて。御仕合も見らまして候。

弁慶「中々一段の日和にて我等も滿足に存じ候。

船頭「それにつき。武藏殿へ少し訴訟申したき事が御座あるが。

何と御座らうぞ。

弁慶「それは何事にて候ぞ。

船頭「別の事でも御座ないが。只今こそかやうに御中違はせ給ひ。西國の方へ御下向なさるゝとも。追付御中なほりあらうずるは。疑もなき事にて候。其時は西國の船づかさを我等一人に仰せつけらるゝやうに武藏殿の御取り合せ頼み候。

弁慶「是は御身に似合ひたる事にて候間。それがしの御取り合せ申さうずるにて候。

船頭「いや武藏殿さへ左樣に仰せらるれば。我等の訴訟はさつとすんだ物ぢや。必々御代に出てさせられた時に。御失念なきやう頼みまするぞ。皆々只今。武藏殿の仰せを聞いて。御座船に精を出だし候へ。〳〵。（えい〳〵。（えい〳〵は櫓を押して漕ぐ聲なり）是はいかな事。あの向山の上へ。はるは雲が出たが。かならず雲が出ると事をするが。はあ心もとない事ぢや。

弁慶「何とやらん雲のけしきが替りて候よ。

船頭「いや〳〵少しも御氣遣あるまじく候。此船には究竟の水手どもをすぐつてのせ申し。其上それがしかんどり仕り候上は。少しも御氣遣あるまじく候。えい〳〵さればこそ。雲のけしきが替つた。波が荒うなつたぞ。皆々精を出だし候へ。（こゝにて肩衣の右の肩を脫ぎ）えい〳〵。ありや〳〵波が來るは。波よ〳〵〳〵。こせ〳〵〳〵しい引。（こせこせは波に船の上を打ち越せといふ事。しいは波の越して引く音なり）えい〳〵〳〵。

弁慶「あら笑止や風がかはつて候。あの武庫山おろしゆづりはが嶽より吹きおろす嵐に。此御船の陸路に着くべきやうもなし。

皆々心中に御祈念候へ。

ワキ「いかに武蔵どの。此御船にはあやかしが着きて候。

弁慶「しばらく。左様の事は船中にては申さぬ事にて候。

船頭「あゝそなたは。近頃聊爾な事をおしやる。最前乗りやる時から。何ぞ一ことおしやりそうな人ぢやと思うたが。案の如くむさとした事をおしやる。船中てそのやうな事は言はぬもので おじやる。そなたのやうな人は。船底へおしさがつて居やれ。

弁慶「船中無案内の事にて候間。何事も武蔵にめんじて給はり候へ。

船頭「武蔵殿の左様に仰せられれば。料簡も御座らぬが。中々てもない事かな。さればこそ又ありや〳〵。波よ〳〵〳〵。こせ〳〵〳〵。しい引。えい〳〵。

こゝにて「あら不思議や海上を見れば」の弁慶の詞となり。判官との問答ありて。「一門の月卿雲霞の如く。波に浮みて見えたるぞや」にて太鼓の打ち出しあり早笛となる。

此處「波に浮みて」と半幕にする事もあり。半幕とは鏡の間にて幕にかゝり居るシテの姿の。胸あたりより下の見ゆる程に。幕を半分あぐるをいふ。石橋望月などにもあり。但しこれは前後特などいふ習の時なり。

後ツテ出ヅ

後ツテは平の知盛にて。黒頭に鍬形を戴き。太刀を佩び長刀を持つ。面はアヤカシ又は鷹などが普通にて。法被半切は狩衣に替る事もあり。金剛流にて白波之傳といふ時は。黒頭の下直面に白の猩面を用ふ。

半幕

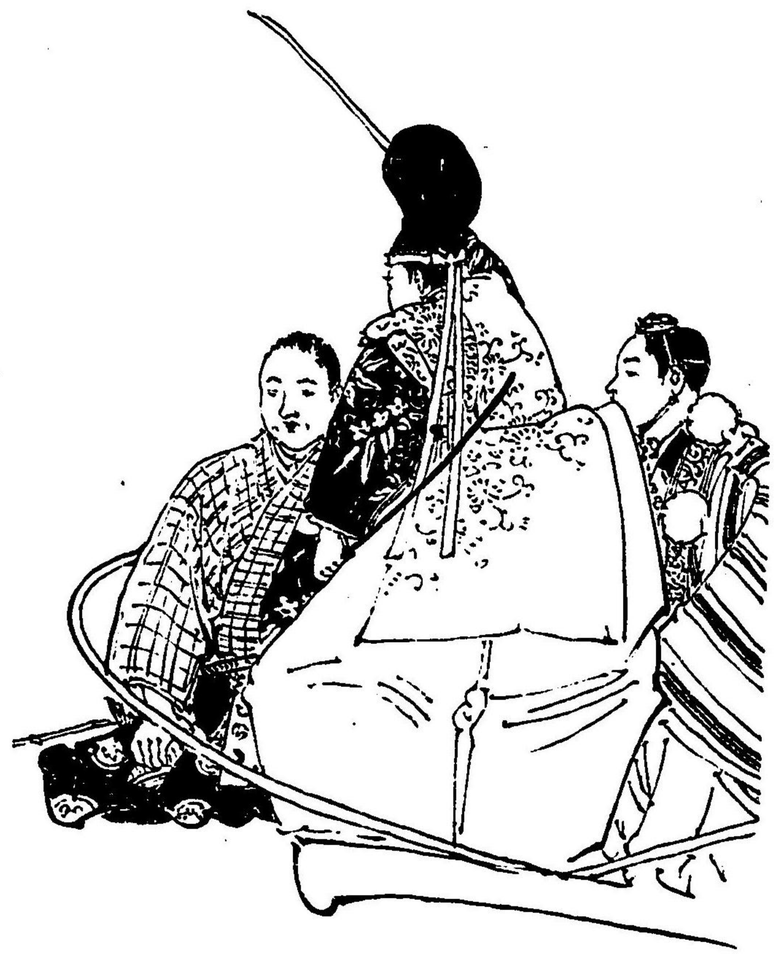
さて早笛にて長刀をかたげて出て來り。橋掛より欄干ごしに判官を見込み。幕の内まて跡しさりして長刀をかいこみ。更に出てゝ舞臺に入り。「そも〳〵是は。桓武天皇九代の後胤。平の知盛幽霊なり」と

歌ひ。

此ところも「見えたるぞや」より直に。床几にかゝりたるまゝ半幕にて歌ひ出だすもあり。其時は「聲をしるべに出て船の」の返しの前早笛になりて。直に出て。舞臺に入りて飛び開き。「聲をしるべに」の返しとなる。

「あらめづらしや如何に義經」と判官を見る。判官刀に手を掛くる。それより聲をしるべに出て船の」と拍子ふみ。「知盛が沈みし其有樣に又義經をも海に沈めんと」と判官の前に行きて再びねめつけ。長刀とり直してためて見。又突き出だして「潮を蹴立て」と。波を蹴あぐる心にて拍子ふむ。こゝらの拍子は總べて音せぬやうに踏む習。喜多流にはありとかや。船辨慶波間之拍子といふ小書あるもの是なり。「前後も忘ずるばかりなり」より舞働となる。すなはち知盛と判官と戰ふさまを見するなり。觀世流の太鼓にては祈の手など打つ事あり。

舞働すみてシテ長刀を突き立て肩に持たせ居ると。「其時義經すこしも騒がず」の謠出て。判官太刀を拔き「うつゝの人に向ふが如く」と二つ三つ切り合ふと。「辨慶おし隔て」とさゝへられ。シテ長刀を上げて近づけば。祈り伏せられ〳〵して。「惡靈次第に遠ざかれば」と橋掛まで長刀ひきずりて立ち退き。「辨慶船子に力を合はせ」と。船頭ふたゝび櫂竿取りて漕ぐ形をなし。「また怨靈は慕ひ來るを」と。シテは長刀を捨て太刀を拔きて船の前まで來るを。辨慶の數珠にて追ひ拂はれ。「また引く汐にゆられ流れ」と。太刀を襟に掛けてソリガヘリし。又ガッシして橋掛にゆき。飛び廻りて三の松あたりにて留むる。是れ普通の形なり。あるひは終まで長刀捨てずして。「追つ拂ひ祈りのけ」と。飛び開きして幕の方へ向き。「また引く汐に」と太鼓のナガシにつれ。長刀引きずりながら。段々位すゝめて入る時もあり。大小太鼓も揃ひ。シテの上手なる時は。幕に入りて後はじめて其幻なるを知り。



潮の聲のみいつまでも殘る心地するなり。シテ入り幕下りて後。靜に「あと白波とぞ」を歌ふ事もあり。又その時に半幕にて。シテの後姿を謠の切る

能のしたり一の型

別習前後

るまで見せおく流儀もあり。

昨三十四年の一月梅若舞臺にて。別習前後といふものを見たりしが。前ジテは梅若萬三郎。後ジテは萬三郎車より落ちて手を傷め居る頃なりしかば。父の實が代りて勤めしを。いさゝか記憶のまゝにつまみて記さば。舞は序の舞にして。初段オロシの處にて拍子ふみ。三の松あたりまで行き。判官を見て泣く形あり。後は半幕にて謠ひ出し。早笛にて出でゝ一の松にて飛び開き。是より總べて橋掛にて形をなし。働になりて舞臺に入り。判官の前まで流足にて横運びに流れゆき。長刀きめて一つ判官を見る。これにて段となり。仕手柱に行きて長刀を上げる處に太鼓に祈の手ある。いつもの如し。

替の形

船辨慶の替の形は。右の「前後」「別習前後」「重キ前後」などの外。流儀によりて。「白波之傳」「波間之拍子」「遊女之序」「三足半之序」などいふ習もあり。替間には。「船唄」「名所教」などいふを見たる事もありき。

三輪

作物　庵(杉の木にかたどる)

前ジテ　里女

小面又は深井　葛　葛帶　箔　唐織　數珠　木の葉(又は水桶)

後ジテ　三輪明神

增　風折　色大口　長袴(又は舞衣)　腰帶　扇　幣

ワキ　玄賓僧都

角帽子　無地熨斗目　水衣　腰帶　數珠　扇

アヒ　里人

長袴上下　扇

三輪の明神御身を里女と現じて玄賓僧都の庵室に來り。衣を請

能のしなり　一の卷

ひ受けて歸り給ふを以て前の段とし。僧都その衣の神木の杉にかゝり居る事を聞きて其木のもとに至り。神の御聲をきゝ。神樂舞ひ給ふを見るを以て後の段とす。シテは女にして後は神体なれば。葛物にも神能にも用ひらる。故に略の脇能にも三番目にもするなり。太鼓あり。季節は秋。土地は始は僧都の庵室。後は明神の社頭。

作物出づ

大小鼓座に着くと作物大小座の前に出だす。作物は四つ柱に注連を張り。柱の上に杉葉さしたるを。引廻し掛けて大小の前に出だし置く。杉の木の心なり。

ワキ出づ

僧ワキ出てゝ玄賓僧都なるよしの名乗あり。いつも樒を摘み閼伽の水を汲みて來る女あるを。今日も待ち受けて其名を尋ねばやとの心を述ぶ。

シテの次第

次第にて里女に出で立ちたるシテ出づ。仕手柱先にて大小の方ひきて「三輪の山もと道もなし」を歌ひ。地謠の地取する間に正面に直して。「げにや老少不定とて」のサシを歌ふ。

案内を乞ふ

なり。こゝに玄賓僧都とて尊き人の御入候へば。いつもの如く樒閼伽の水を持參して差上げんとするよしを獨言にし。ワキの方へ向ひて案内を乞ふ。ワキは庵の内にて之を聞き。いつもの人かと問ふ。シテは山影門に入つて推せども出でずと。古詩を吟じて門の扉の明かぬ心を聞かせ。ワキは月光地に敷いて拂へども又生ずと次の句を承けて口ずさみ。「柴の編戸を押し開き」の地になりて。シテは門を入りたる心にて。ワキの前に至り座す。此ところ。左の手にて戸を左へ明くる形をなすも。又扇持ちたる時は右の手に扇ひろげて右の方へ明くる形をなすもありとぞ。此戸を明くる形ある時は。ワキと顔を見合はす事あり。門外にては見えざりし僧の。入りてから始めて見えたる心ならん。

初同

かくて持ちたる櫛を前に置き。「罪を助けてたび給へ」と。合掌して僧都に罪障消滅の救を頼む心あり。「秋寒き窓の内」の地の間は。謡の文句にあづけたれば。シテには別に形もなし。「遠の水音も苦に聞えて」と。耳を立てゝ水の音を聞きたる太夫もあれど。通例には此形を見ず。

衣を受く

謡すむとワキへ向ひ。秋も夜寒になりたれば衣を一重給はれとの詞あり。やすき間の事とてワキは水衣を取り出だし。シテの前へ投げ渡す。此投げ渡すには意味ある事にて。かなたは僧。こなたは女。手づから授受するは無禮なりとの心なるを。非難せし新聞評者のありたるこそ可笑しけれ。シテは之を戴き受取りてワキの前を立ち少し歸ると。「さて〳〵御身は何くに住む人ぞ」と尋ねらる。わらはが住處は三輪の里なれば。杉立てる門をしるしに尋ね來ませと言ひ捨て。かき消す如くに失せにけりと。作物の中に中入し。こゝにて前に持

中入

アヒ

ち歸りたる水衣を作物の上に掛け。シテは唐織ぬきて。長絹緋の大口に烏帽子を被り。全く三輪明神の姿となる。

こゝにてアヒ出て。是は和州三輪の里に住居するものなるが。宿願ありて大明神へ七日の日參するよしを述べ。今日は滿參の日なれば滿足なりとて。神前に來りて見るに。不思議にも神木の杉の一の枝に衣の掛かり居るを見つけ。急ぎ此よしを告げんとて。僧都の庵室に至り。しか〳〵なりと語れば。僧都も驚き。言語道斷奇特なりとて。我等も立ち越え見んといひ。アヒは元の座に歸る。

それよりワキは立ちて。草庵を出て杉の木の側にゆくよしの文句を歌ひ。杉の木に衣の掛かれるを見上げて。「不思議やな是なる杉の二本を見れば。有りつる女人に與つる衣のかゝりたるぞや」と歌ひ。近よりて見れば衣の裾に金色の文字すわれりとて。讀みて見るに。「三

後ジテの出端

つの輪は清く清きぞ唐衣。くると思ふな取ると思はじ。」といふ和歌なりしといふ文句ありて。出端となり。後ジテ作物の中より。「千早振。神も願のある故に。人の値遇にあふぞ嬉しき」といふ和歌を歌ふ。

後ジテ作物より出づ

此神歌の聲は。風か嵐か。有りと思へば有り。無きぞと思へば無く。玄賓僧都の心から梢の夜風を神の御聲と聞きなしたるかも知られずとて。謠方に口傳のある處なりと言ひ傳へたり。今も果して其心もて歌ふ人ありやなしや。

これよりワキとの掛合ありて。「女すがたと三輪の神。ちはや掛帯ひきかへて。唯はふり子が着すなる。烏帽子狩衣もすその上に掛けといふ地の謠と共に。シテは作物より出て來る。こゝに始めて神躰を現はし給ふ心なり。此時作物の引廻をのくるのみにて出て來らず。「御影あらたに見え給ふ」と。床几に掛り居る姿を見する仕方もあり。其時はクセになりてから作物を出づるなり。

クセ

クリおよびサシすみてクセあり。舞クセにて。昔し大和の國に年久しく住める夫婦ありしが。その夫は夜のみ通ひて昼は來る事なし。あまりの不思議さに其夫の歸る時。裳裾に糸附けたる針を刺し。跡に引きたる糸をしるべに尋ねゆきしに。此山本なる杉の梢に三わげの糸の殘りたるを見たり。是より此地を三輪と號し。通ひ給ひしは三輪明神なりしといふ物語を作れるなり。「もすそに之をとちつけて」と。扇を針にして糸をとぢくる仕方。又「糸くりかへし行く程に」と。左の手にて糸を引き伸ばす仕方など有りて。面白きものなり。

ロンギ

クセの跡に打切ありてロンギとなる。ワキは明神の出現にあひていよ〳〵頼もしき心を述べ。シテは猶も神代の物語を委しくあらはして。僧都を慰め申さんとて。岩戸の前の神樂を學び見する心にて。幣を持ち。「これぞ神代のテンと太鼓打出ありて。「千早振」と歌ひながら左右左と振り戯きて神樂となる。神樂とは舞の一種にして。神子

神樂

三輪

また女躰の神の舞ひ給ふ曲なり。通例は三段にて其跡を直りと稱へ。更に二段の神舞あるを法とす。されど五段神樂とて。直り無しに悉皆神樂にする事もあり。序と稱へて神樂の掛りに拍子四つばかり踏む事の有るものと無きものとあり。此三輪や龍田などは序ありて。卷絹は序なしなり。卷絹は神子ゆゑ神がゝりの舞とはいへど位を輕しと見。三輪や龍田は神女の舞ひ給ふなれば。位を重しと見たるが故に。序の有無の別は置きたるならん。神樂の終り。直りの前に。幣を後見に渡さんとする處に少し舞の手あり。名づけて幣捨の段といへり。直りて後は扇にて舞ふなり。神樂の間にシヅミとて舞ひながら頭を下げるやうの仕方あるは。神前の舞ゆゑ神拜の心なるべし。神樂に限りて小鼓の打方。ブツポウブツポウブツポウブツポウと。終始雨垂拍子に間斷なく打つは。古の神子神樂の拍子の遺風なりといふ。

能のしなり　一の卷

舞のあと

舞の上りは「天の岩戸を引き立てゝ」といふ和歌にて。扇にて戸を引き立つる形あり。ンテ眞中にすわりて。「八百萬の神たち。岩戸の前にて之を嘆き。神樂を奏して舞ひ給へば」と歌ひ。左の手と右の扇と打ち合はせて笏拍子を打つ形をなし。「天照大神その時に岩戸を少し開き給へば」の地になりて。扇にて戸を開く形をなし。「日月ひかりかゝやけば」と扇にてさして一つまはりて。「人のおもて白々と見ゆる」と。八百萬の神を見わたす心にて脇正面の方へ見まはし。「おもしろやと神の御聲の」と上扇して一同に歌ひかなでし心を示し。「妙なる始の物がたり」と太鼓打込ありて撥を收め。神代の物語はこゝに終りて。「おもへば伊勢と三輪の神」より。其神德を述べ。玄賓僧都の夢にありたる御告の有難きよしをいひてキリとせり。一見おのづから渦仰心のおこるを覺えん。

キリ

型の形

この能に誓納と稱へて重き秘事あり。神樂の舞方など述へりといへど。おのれ未だ見ざれば知らず。其外金剛流にては神道。喜多流にては神遊岩戸之舞などいふ習あり。

櫻間金記の三輪を見たりしに。「神は跡なく入らせ給へば」と作物に入り。扇左に取りて顏を隱しつゝ下に居。「神樂を奏し」の笏拍子の形はなくして。「又とこやみの雲晴れて」と作物を出てたり。觀世流などの繪馬の所作に似て。これも面白く感じたりき。

兼平

前ジテ　老翁　笑尉又は三光尉　尉髮　鼻斗目　水衣　腰帶　棹

後ジテ　今井兼平　龍のしなり　一の型

作物　船（柴を附く）

平太　梨子打　黒髭　厚板　半切　法被　腰帯
太刀　扇

ワキ　旅僧
角帽子　熨斗目

アヒ　里人
長袴上下　扇　水衣　腰帯　扇　數珠

木曾義仲の臣下に今井四郎兼平といひしは。江州粟津が原の合戦に。主君の御供して花々しく討死せし人なるが。其幽霊あらはれて旅僧に其物語をなし。亡き跡を弔ひて給はれと望む事を作れる能なり。修羅物の一つにて二番目に用ふ。太鼓なし。處は近江粟津が原。季節は初夏。文句の中に若葉の景色あり。前シテは通例老人にて尉面に尉髪なれども。一度直面にて實生九郎のせしを見たる事ありき。芝の能樂堂なりしと覚ゆ。

ワキの次第

次第にてワキ出て。仕手柱先より大小の方に斜に向ひて。「はじめて旅を信濃路や」を歌ふ事いつもの如く。地取すみて名乗あり。木曾の山家より出てたる僧なるが。木曾殿の御跡とむらはんとて粟津が原に急ぐよしを述べ。信濃路を發して江州矢橋の浦に着きたる意味の道行をうたふ。かの川柳に「脇の僧そろ〳〵いッて急ぎ候」とはこゝの事なり。

作物出づ

ワキ例の處に着座すると。後見船の作物を持ち出てゝ仕手柱先の處に置く。その舳先の方には柴にかたどりたる萩の枯枝を結ひつけ。柴舟に見せたり。

シテの一聲

一聲になりて船人に裝ひたる老人のシテ出て。船の中に立ち竹の棹を持ちて。「世のわざの憂きを身に積む柴舟や」を歌ひて。其なりはひの困難なるをいひて。先づ我身の船人たるをあらはす。

ワキとの問答

ワキ之を見つけて便船を借らんといふ。渡船ならねば貸しがたしと

ワキ船に乘る

いふ。折ふし外に舟も無ければ出家に免じて貸してよと又乞ふ。げにも出家の御身なれば御經にも如渡得船といふ事ありとて。始めて便船をかす事に決し。「法の人にてましまさば。船をばいかで惜むべき。とく〳〵めされ候へ」の初同にて。ワキは船に乘りて前にあり。シテは棹をさして後にあり。波のまに〳〵漕ぎゆく心。唯文句にて知るを得べし。

船中のつれ〳〵なるまゝに。ワキは見渡す浦山の名所を尋ね。シテは一つ〳〵に委しく說明す。「まづ向に當つて大山の見えて候は比叡山候か」「さん候あれこそ比叡山にて候へ。麓に山王二十一社。茂りたる峯は八王子。戸津坂本の人家まで殘りなく見えて候」といふを始として。比叡山は王城の鬼門なる事。傳敎大師桓武天皇と御心を一つにして根本中堂を建て給ひし事。麓に少し深く見ゆるが大宮の御在所はし殿なる事。その外比叡山の學問より其衆徒の繁榮まで。答へて漏らすなく。語り〳〵ゆく程に。志賀辛崎の一つ松まで近く見えゝ來りて。間もなく粟津の汀に着きたる心を見す。シテは「よせよ〳〵

能のしなり　一の卷

中入

アヒ

シテの一聲

磯ぎはの」と。棹の先に右の手を添へて船をやる仕方をなすのみにて。動きもせぬ船が動くやうに見え。有りもせぬ四方の眺めまで想ひやらるゝは。能の面白き處なり。かの波幕を敷きつめてギイ〳〵と船を引きずりあるく芝居とは。其雅と俗と優劣はたして如何。ワキは謠の内に船を出でゝ脇座にゆき。シテは「粟津に早く着きにけり」の返しにて。棹を捨て船を出てゝ中入す。幽鬼の姿は何くにか消えたる心なり。後見こゝにて船を持ち樂屋に入る。こゝにアヒ出てゝワキと問答し。望まれて兼平の物語をなす一段あり。

ワキの待謠例の如くありて一聲となり。後ジテ此度は平太面に梨子打烏帽子を被り。法被半切に太刀を佩き。今井四郎の出立にて舞臺に入り。仕手柱先に立ちて「白刃骨を碎く苦しみ」を歌ふ。之を見てワキは甲冑を帶したるは何人ぞと問ふ。これより色々問答ありて。シテは兼平なるよしを答へ。矢橋の浦の渡守と見えしは我なれば。同

クセ

じくは此舟を御法の舟にして彼岸にわたし。成佛せしめ給へとの文句ありてクリとなり。シテは舞臺の中央に床几に掛かりて。其古の物語をサシとクセとにて語る心なり。

まづ木曾殿はわづか七騎にて落ち給ひしが。兼平この近江路にて參り合ひ。三百餘騎になりぬたるに。遂に又主從二騎の小勢となりしかば。兼平すゝめて。それがし防矢仕るべければ。其間に御自害あるべしと申せば。木曾殿は兼平一人に討死させん事を諾なはず。我も共にと引き返し給ふを。兼平に又いさめられ。粟津の松原さして落ち給ひしに。折しも正月の末なれば。「あやしや通路の。末白雪の薄氷。深田に馬を駈け落し」と。馬を乘り落したる心にて拍子踏み。「引けどもあがらず」と手綱を引き立つる形をなし。「打てどもゆかぬ」と扇を鞭にして後の方を一つ打ち。「駒の頭も見えばこそ」と居立ちて馬の頭の方を見て。「こは何とならん身の果」と。力抜けたる心にてがく

りと床几に腰をおろす。わづかの手ながら其時の有様を見るが如し。「せんかたも無くあきれはて」と正面に顔を直し。「此まゝ自害せばやとて」と。刀に手を掛け。「さるにても兼平が」と。橋掛の方を遠く見やりしが。「いづくより來りけん」と歌ひながら正面むき。「矢一つ來つて内兜にからりと入る」と。扇にて射られたる處を指し。「痛手にてましませば。たまりもあへず馬上より。遠近の土となる」と。床几を立ち膝を突きて下に居。「所はこゝぞ我よりも。主君の御跡を」と。ワキに向ひて頼む心あり。此文句を味ひて此能を見る人。泣かざるは必ず不忠の臣ならん。

ロンギ

打切ありてロンギとなり。是よりいよ〳〵兼平戦死の物語となる。その雄壯いふべからず。「是ぞ最期の荒言と」鎧ふんばり大音あげ「木曾殿の御内に今井の四郎」と名のりかけて大勢の中に割つて入る處。「もとより一騎當千の。秘術をあらはし大勢を。」と粟津の汀に追つめてまくり切にする處。「そのゝち自害の手本よとて」と太刀をくはへて馬上より逆様に落ち。刃に貫ぬかれて死する處。一手々々に其有様をあらはし。あつぱれ勇士の摸範を示すに足る所作ならぬはあらず。

キリ

羽衣

シテ　天女

増　長葛　平元結　葛帯　天冠　箔　腰巻

腰帯　扇　物着より長絹

ワキ及ワキツレ

駿斗目　大口　水衣　腰帯　扇　釣竿

作物　松（長絹掛く）

駿河の三保の松原に天人天降りて羽衣を松に掛け置きたるを。

能のしなり　一の巻

白龍といふ漁夫見つけて家に持ちゆかんとす。それは天人のものなれば返せといひ。これは拾ひたる衣なれば返さじといひ。互に爭ひしが。漁夫の遂に返すまじきを見て。天人は羽衣なくては飛行の自由を失ひ。天上に歸る事も能はずといひて泣く。あまりのあはれさに漁夫は返すべしといひ。天人は其返報に舞樂を奏して見せんといひ。つひにめでたく舞の袂を飜しつゝ。足高山や富士の高嶺と舞ひのぼりて。霞にまぎれ失せたるよしを作れる能なり。葛物にて三番目に用ふ。太鼓あり。季節は春。

土地は三保の松原。

囃子方着座すると。後見松の作物に長絹かけたるを持ち出てゝ正面先に置く。但し此作物を用ひずして橋掛一の松の欄干に長絹を掛け置くは。觀世流にて和合之舞といふ習の時の式なり。

作物出づ

ワキの一聲

一聲にてワキとワキヅレ二人と出て。舞臺に立並び。「風早の三保の浦わをこぐ舟の」を歌ふ。おの〳〵釣竿をかたげて今しも釣に出づる處なり。それより白龍といふ漁夫なりと名乘ありて。のどけき春の景色にさそはれ。釣に出でたるよしの下歌上歌あり。謠すみてツレは地謠前に着座し。ワキは竿を後見座に置き扇を持ちて出て。「われ三保の松原に上り。浦のけしきをながむる處に。虛空に花ふり音樂きこえ。靈香四方に薫ず。これ唯事と思はぬ處に。是なる松に美しき衣かゝれり。よりて見れば色香たへにして常の衣にあらず。如何さま取りて歸り古き人にも見せ。家の寶となさばやと存じ候」と述べて松の上なる長絹を持ち歸らんと。脇座の方へ三四足ゆきかゝる。

シテの呼掛

シテ幕を上げさせて。「なふ其衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ」と呼び掛く。ワキはシテの方を向き。「是は拾ひたる衣にて候はどに。取りて歸り候よ」と答ふ。それは天人の羽衣とて。たやすく人間に與ふべきものにあらず。もとの如くに置き給へ」といひながらシテ

は橋掛を出て。「そも此衣の御主とは。さては天人にてましますかや。さもあらば来世の奇特に留め置き。國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ」とワキは謝絶す。此間にシテは靜々と舞臺に入り來る。頭に戴きたる天冠はあれども。身には摺箔の衣に腰卷したるのみ。一たび見るより羽衣なくしてあはれなる樣なり。

「悲しやな羽衣なくては飛行の道もたえ。天上に歸らん事も叶ふまじ」といへば。ワキは弱みに附け入り。「此御言葉を聞くよりも。白龍いよ〳〵力を得。もとより此身は心なき。天の羽衣とりかくし。叶ふまじとて立ちのけば」と。後の方に立ちのかんとす。此に於て「今はさながら天人も。羽根なき鳥の如くにて」と。打ちしをれ居たりしが。ワキはとても衣を返すべき樣なければせんかたなく。天の原ふりさけみれば霞立つと吟じては空を見上げ。「迦陵頻伽のなれ〳〵し」より角の方にゆきては。「雁金のかへりゆく。天路を開けばなつかしや」

返さんといふ　ワキ衣を

と又見上げ。「千鳥かもめの沖つ波」と左の方に廻りて。「春風の空に吹くまてなつかしや」と。前の「天の原」の處を更に見あげて。返しにしを〳〵と跡に下りながら泣く。情あり趣あり景色あり。

ワキは天人の泣く有樣に心動きて。「御姿を見奉れば。餘りに御痛はしく候ほどに。衣を返し申さうずるにて候」といふ。シテは喜びに堪へず。「あら嬉しやこなたへ給はり候へ」といふ。是より天人の舞樂を舞ひて見せ給へとワキに所望し。舞ひては見すべけれど衣なくては舞はれずとシテは請求し。舞はぬ内に衣を返さば舞をも舞はて歸るべきかとワキは拒み。疑といふ事は人間にありて天上には僞なしとシテは恥しめ。遂に衣を返す事となり。シテは兩手にて之を受取り。後見座にくつろぎて其長絹を着る。此くの如く舞臺にて裝束つくる事を物着といふ。其間は大皷小皷にてアシラヒを打ち居るなり。

物着　裝束つけて出づ

裝束をはりて仕手柱先に立ち。「乙女は衣を着しつゝ。霓裳羽衣

羽衣

の曲をなし」と歌ひ。ヲキと二三句掛合ありて。「東遊の駿河舞。此時や始なるらん」とくつろぐ。是より舞樂の心にて。クリに出て、大小の前に立ち。サシすみてクセとなる。舞クセなり。

クセ

「おもしろや天ならで」と。右の方受けて乙女の姿を見る心あり。「此松原の」と指し廻して其扶色をながめ。「月清見潟」と月を見。「たぐひ波も松風も。のどかなる浦の有樣」と。拍子ふみて打切となり。「君が代は。天の羽衣まれにきて」と。例の如く上扇大左右打込などありて。「落日の紅は」と雲の扇して遠く見わたし。「はらふ嵐に花ふりて」と扇かざして花の降りくるをながめ。「白雲の袖ぞ妙なる」と太鼓の打出しありてコヒアヒとなり。シテ合掌して「南無歸命月天子」を歌ひ。「東遊の舞の曲」とくつろぎて。序の舞となる。舞は五段が法なれど。略しては三段にもするなり。

序の舞

破の舞

舞の上りは和歌にて。「あるひは天つみそらの綠の衣」と上扇あり。「な

能のしをり　一の卷

びくもかへすも舞の袖」にて又破の舞となる。破の舞は極めて短き舞にて。ほんの餘興を添ふるといふ程のものなり。

「あづま遊の數々に」よりは。舞曲いよ〳〵闌になりたる心にて。「三五夜中の空に又」と再び月を見あぐる形あり。「七寶充滿の寶を降らし」と招扇二つばかりして正面へ出て。「國土に之を施し給ふ」と。扇の上に充滿の寶を受けて施し與ふる心にて。之を左の手に持ち前に出だし。「天の羽衣浦風にたなびきたなびく」と。ハヤ扇二つ三つして羽衣の春風に靡く樣を思はせ。「あし高山や富士の高嶺」と。扇にて高く橋掛の方へ高嶺を仰ぎつゝゆく心にて指しゆき。「かすかになりて天つみそらの」とかざして廻り。「霞にまぎれて失せにけり」と。開きて留拍子例の如く蹈む。拍子蹈みて後も。笙笛琴箜篌の音樂なほ耳に殘る心地して。興ながく盡きざるは殊に此能なり。シテにより舞臺にて留むる事も。橋掛にて留むる事もあり。觀世清孝の三の松にてしたりし

姿の優美さは。開き足と共に天冠の瓔珞のゆらめきたる面影。今も眼前にちらつく。

觀世流にては。彩色之傳または和合之舞といふ習あり。彩色の時は。破之舞の處。シテ橋掛へゆき。ながめわたす形ありて。太鼓のナガシにつれ舞臺に入り。直に「東遊のかず〳〵に」となる。又クリもサシもクセも拔けて。「あづま遊の駿河舞此時や始るらん」のあと。直に「なむ歸命月天子」となるもあり。和合の時は序の舞の終の段より俄に進みて破の舞の位となり。「あるひは天つみそらの」の和歌より「なびくもかへすも舞の袖」まで拔けて。舞の上り直に「東遊のかず〳〵に」となり。「たなびきたなびく」と謠すゝみ。「あし高山や」と靜になりて太鼓のナガシと共に橋掛にゆき。「かすかになりて」と長絹の袖をかづき。謠殘して幕に入る。ワキは名殘惜しげに仕手柱の際まで見送て出て。「失せにけり」と拍子蹈む。

他のしなり　一の型

之を名づけて脇留といひ。ワキの方にても重き習とすなり。
此シテ先づ入りてワキに留めさする形は。彩色の時にもする事
あり。餘情ありて面白き形なり。右二つの習いづれも。「空に吹
くまでなつかしや」より前の處を。橋掛一の松あたりにてする事
もあり。

霞隱之傳

盤渉替之形

喜多流にては「足高山や富士の高嶺」と。一の松あたりにて雲の扇
をなし。海上にうつれる富士の高嶺をながめおろす形あり。是
もおもしろし。同流にて霞隱之傳といふ習になると。觀世流の
和合の如く。シテ先づ入りてワキに留めさする事もあり。
金春流にては。櫻間伴馬の盤渉替之形といふ小書あるのを見た
りしに。天冠には蓮花をいたゞき。序の舞は初段オロシ跡より
盤渉になり。段々に位つまりて。打込一拍子に「あづまあそびの
數々に」となり。和歌の拔くる事。觀世流の和合の如く。「七寶充
滿の寶を降らし」と靜まり。「さるほどに時うつゝて」と靜まり。是
より橋がゝりにゆき。（これは觀世流にてもあり）「たなびきたな
びく」と五つ六つハヤ扇して。舞臺に入らず欄干際に出て。「三保
の松原」と面使ひして見まはし。「あし高山や」と左へ廻り。「かすかに
なりて」と。右の袖をかづき。左に持ちたる扇を顔の前に高く上
げ。靜に霞に入りたる心にて幕の下に足とめ。太鼓の留撥を聞
きて幕おろさせたり。是もめづらしかりき。

安宅（あたか）

シテ　辨慶

直面　兜巾　厚板　大口　水衣　鎧懸　腰帶　小サ刀

能のしかり　一の卷

数珠　扇　笈物

判官　義經(子方)

直面　兜巾　厚板　火口　水衣　篠懸　腰帶　小サ刀

数珠　扇　笈　笠　杖

ツレ

シテに同じ。但笈物はあらず。

ワキ　富樫の何がし

梨子打　鉢巻　直垂上下　小サ刀　扇

アヒ　強力

兜巾　狂言袴　脚半　篠懸　笈　杖　笠

アヒ　富樫太刀持

狂言上下　扇　太刀

義經頼朝に憎まれて都に住む能はず。陸奥秀衡を頼まんと。主従わづかに十二人。假に山伏の姿となり。加州安宅の關に來かゝる折しも。關守富樫の何がしに怪しまれ引き留められしを。機轉の策畧とて東大寺建立の勧進帳を讀み。疑やうやく解けて通り越す一段を作れる能なり。この種類の幽靈にも鬼神にもあらぬ人間の能をば現在物と稱へて。二番目または四番目などに用ふ。太鼓なし。季節は都を出てたる時によりて春二月と定む。

土地は安宅の關。後は途中の山路。

ワキの名乗

安宅の關守富樫の何がしに出で立ちたるワキは。太刀持の從者なる狂言を引き連れ。舞臺に出てゝ名乗をなし。判官殿十二人の作り山伏となつて陸奥へ御下向のよし頼朝聞し召し及ばれ。國々に新關を立てゝ通行の山伏を撰むべしとの仰により。此所をば某承つて山伏をとゞむる由を述べ。太刀持を呼びて今日も山伏の御通りあらばこなたへ申せと言ひ附く。太刀持かしこまりたる由を答へて。ワキは

能のこなり　一の巻

山伏の次第

脇座に。太刀持は其下に着座す。

次第になりて判官主従の似せ山伏一行出て來る。判官は子方にて先に立ち。次にツレ山伏九人。次に其従僕なる強力の狂言役者と。舞臺に入りて二側に立ち並び。向ひ合ひて一同々音に。「旅の衣は篠懸の。〳〵。露けき袖やしをるらん」を歌ふ。尤も子方と強力とは歌はず。此次第の文句をば地謡にて地取せずして。

サシより道行

強力が「おれが衣は篠懸の。破れて事や缺きぬらん」と歌ふ。是も一興なり。

それより直に「鴻門柝破れ都の外の旅表。日もはる〳〵の越路の末。思ひやるこそ遙なれ」を歌ひ。シテ「さて御供の人々には」と。ツレ山伏を見まはし。ツレ一同に「伊勢の三郎駿河の次郎。片岡増尾常陸坊」と受け。シテ「辨慶は先達の姿となりて」と正面むきて歌ひ。ツレシテ共に主従以上十二人。未だ習はぬ旅姿。袖のすゞかけ露霜を。今日分けそめていつまでの。限もいさや白雪の。越路の春に急ぐなり」と同吟し。上歌になりて。二月十日の夜に都を出て。逢坂の山かくす霞の恨めしきよしの文句などありて。一歩々々と都に遠ざかる心あり。下歌の「波路はるかに行く船の」より海路なれば。謡もゆるやかになりて道の變化を聞かせ。又上歌になりて「氣比の海。宮居久しき神垣や」よりは。謡進みて勇ましく。「なびく嵐のはげしきは。花の安宅に着きにけり。〳〵」と。シテは角の方に四方の景色を見まはしながら出て。二三足立ちもどりて足を踏み留む。如何なる天魔鬼神なりとも。是にはなどかは敵し得べきと見えたり。

一同に休息す

謡切れて。安宅の湊に御着ありたるゆゑ。此處に御休息あるべきよしのシテの詞ありて。判官は脇座に床几に。ツレ山伏は其次々に下に。嚏子方の前まで半月狀に折れまがりて着座するとシテは。判官の前に至る。判官これを呼び掛け。唯今旅人の申して通りつる事を